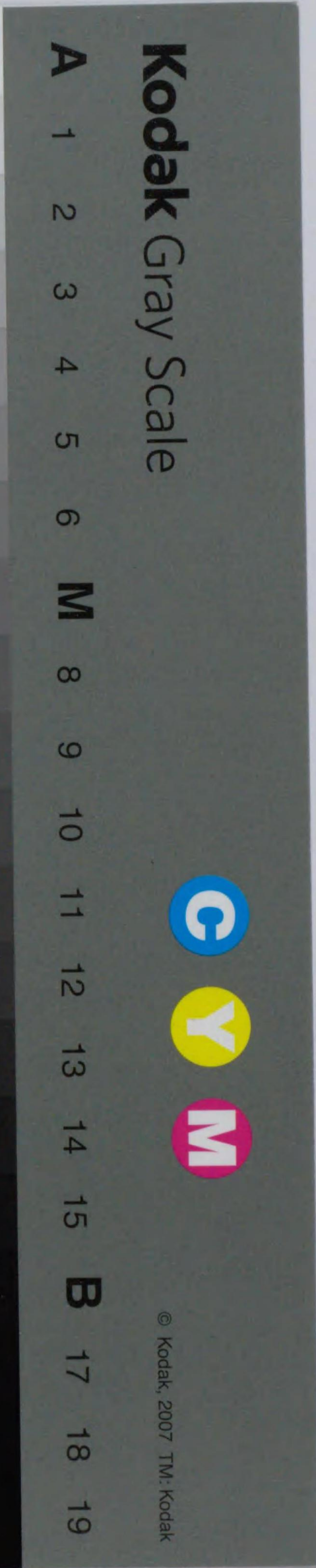


147  
217

147-217イ  
\*1200800032463\*

太  
刀  
山









事莫大於必克

東御書

嘯雨	文學博士	伯爵	畫伯	醫學博士	子爵	伯爵	侯爵	伯爵
龍野	三宅雪嶺	板垣退助	鈴木松年	佐藤進閣	加藤高明	故伊東祐亨	前田利為	東郷平八郎
周一	先生	閣下	先生	閣下	閣下	閣下	閣下	閣下
君	序文	序文	題畫	題額	題額	題額	題額	題額
編								



元帥 松亨書  
連我色後

故伊東元帥

茶屋進  
氣凌霄漢

佐藤進男

剛堂  
至大至剛

加藤高明子

力



枉

梅堂



鼎



147-217

我邦人由未稱力能備者先推野見宿稱  
 今大刀山力士囑余描其像力士當代曰下關山  
 橫綱而斯道之類者余尤喜其囑之得也  
 抑宿稱者出雲國人 垂仁帝朝大和育  
 當麻蹶速者自誇多力以天下無敵又  
 帝乃令擇其對與之比試宿稱即當其選備  
 力而遂挫之之後 皇后崩宿稱請官塚垣以  
 送人馬形樹之陵易殆死者名曰垣輪後賜姓曰  
 土部臣矣惟史刀山亦當代宿稱也亦其像也此  
 非偶然也村田全又特題數語以新記感之并  
 大正七年某月 年 村田全 畫



伯畫年松

### 序 文

抑々角力は我邦古來武術の一にして、中古其逆手を禁して遊技と爲すと雖も、尋常の遊技と異なり勇壯猛烈を極めたる競技にして、徳川氏の治世となるに當て猶ほ諸國浮浪の武士が二君に仕ふるを屑しとせずして力士となりしもの尠からず、而して又た封建の盛時に在ては諸侯の抱え角力なる者あり、帶劔を許されたり。斯る歴史を今日に踐みて來りて自から武士道の貌影を遺せしなり。即ち此角力の技藝は最も國民教育に適し、体育智育の具備するに隨ふて、其氣風自ら弱を扶けて強を挫くの任俠心となれり。角力は稽古道具を要せず、裸體即ち道具なるが故に、一般に之を學ふこと容易なり。是を以て地方村落に集會あれば、年輩者自から行司となり、壯者を指名して角力を試むの風到る所に行はれたり。隨つて國民教育の根幹となり、膽を鍊り、筋骨を鍛ひ、勝敗榮辱の觀念を養ふを得たり。之を武術に適合せしめんとすれば、唯だ逆手を用ゆれば足る、角力は明かに武術の一なり。然るに世運の推移に従ふて、動もすれば角力も亦た營業に流れ力士或は藝人を以て甘んじ、其武術たる所以を忘るゝの傾向なきにあらず。固より太平無事の餘弊は一般に惰弱の氣風を助長し、角力獨り然るにあらずと雖も、予は切に此間に於て大に武士的氣象を養ひ、完全なる國民教育の技術として永久に保持せんことを希望して已まざる也。



龍野周一郎君、頃日太刀山峰右衛門の傳記を著はす、洵に佳擧なり。太刀山は之を角力界の既往に求めて絶倫の名力士たるは何人も異論なき所にして、其傳記の國民教育に裨益するものあるは毫も疑ふ餘地なし。予は聊か此間に在て太刀山の爲めに辯護の勞を取らざるべからざるものあり。彼が力士となれる最初に當り、偶ま脚氣症に罹り、三年の久しきが間之が爲めに稽古を爲すの十分なるを得ざりし一事と、更に其後對手の名力士と勝敗を争へる時に際し、又た腸胃病に悩み、病源判明せず、漸く檢診の結果、十二指腸の病たること確定し、始めて治療の功を奏し、身体恢復せり。此間に在て、常人ならば休業すべきに、彼は之を敢てせずして闘技の場に登れり當時彼の體量は減じて二十三貫となり、其力技に影響せるや大也。然るに世人其情を察せずして、唯だ勝敗の表面を觀て、其境遇の比較に踈なりしは、予の遺憾を禁する能はざる所なり。意ふに太刀山は天品の力士にして角力の才ありて技術も亦た拙からず、身の丈六尺二寸体量二十七貫餘、全身の發達遺憾なく整へり、彼は常に語て曰く自分は頗る弟子を教導するに長せず、即ち自分としては其技を施すに無理を通し得るも、之を弟子に教授するに由なしと。盖し是れ彼の謙辭にあらずして、彼は實に師となりて其全技を子弟に教ふる能はず、唯だ彼の眞技を發揮すべき對手なきが爲めに其天稟を熟練する機會なかりし也。試みに見よ彼の額髪に磨り切れし痕跡なく。彼の前齒に一枚の損折すらなく。彼の兩耳に一の腫痕すらなきにあらずや。畢竟するに彼は斯く

まで之を勞するの必要なかりしに由る、概して之を言へば彼は獨歩の力士にして、終に熟練に至るの必要を有せざりしが爲めののみ。予は實に角力の技術を尊ぶ、即ち國民教育の爲めに最も之を尊ぶものなり。就中體育の模範を示す上に於て然りとす。然るに力士が其身體の強壯なるに拘らずして壽命動もすれば之に伴はず、世人往々疑を此に抱き、力士たるを忌避するの虞なきにあらず。然れども予は固く信ず、否な啻に之を信するのみならず、常に實驗に徴して其然らざるを認めたり。夫の武士が盛に武術を學んで身體を壯健にし、其齡の衰ふるに及んでも、仍ほ心掛けある者は、日夕其學習に怠らず、是の如くにして其人必ず長壽を得たり。之に反して早く武術に荒み、身を懦弱に委せる者は總て短折せり。角力も亦た必ず此例を出でず、故に力士を廢して後も、常に徒弟を對手として汗を出して運動するに怠らすんば、何ぞ復た壯健にして長壽ならざるの理あらんや。聞く太刀山峰右衛門、今回角力界を勇退するの意ありと。予は彼が必ず前言を守つて自愛し、永く名力士の模範を世に示さんことを翹望するに堪へず。今ま太刀山の傳記成るに際し、聊か懷抱を述べて之を卷頭に冕することは是の如し。

大正六年十一月

伯爵 板垣退助



序

百萬石の雄藩とは舊幕時代に生れた老輩が記憶するのみで無く、今日の中小學生徒に之を知るのが可なりにある。東西南北より寄り来る人が本郷の赤門を觀、其の百萬石と稱して將軍に次ぐの威望を具へた大名の記念物であるを認める。赤門は文部省の管轄に歸し、前の如く朱塗りにするに數萬圓を要するとして、ペンキにするの餘儀ない事になつた。益の有無を別とし、明治政府も及ばぬ所がある。

百萬石は土地として加越能三州を指し、日本海に突出し、飛驒高原を背にし、山海の形勝を控へ、北陸の雄鎮たるに堪へる。産物が豊富でなくても、相應にある。

所が雄藩と見られる丈け、幕府に忌まれること多く、藩政當局者は唯だ爪牙を隠し、嫌疑を避け、二百幾十年も平穩に過ぎ、忽ち時勢の急變して幕府の倒れるに驚いたが、驚いて起き上がれば最早時勢に取り殘され、百萬石に人なしと云はれて仕方がない。高位高官は新藩閥の占める所となつた。

藩閥の力は政治に限らず、實業に普く、更に社交に及び、四方八方に鐵條網を張つて居り、之を破るは容易でなく、唯だ眞の實力で優劣を決し得る者が閥の外に顯れるに過ぎぬ。大臣の能は明白に判らず、大將の能は明白に判らず、無能でも並び大名になれるが、碁



盤に向つては曖昧にして居れぬ、何段の格か、初段に何目か、明白に判る。殿様藝と云ふのもあれど、是れは別扱ひに屬する。

能登から出た横綱阿武松緑之助は、年寄になつてから七十四年も経て居り、其の相撲振りを見た者は現に一人も無からう。けれども越中から二名も横綱が揃うて出て、一名は今尚ほ天下無雙の勢である。

太刀山峰右衛門は横綱中の横綱、實に横綱の記録を破つて居る。若し歐米に生れたならば拳闘チャムピオンの記録を破つたであらう。其の如何に理想的体格を以て闘技界に闊歩し來つたかは本書に悉くしてある。彼の如き強健なる身体は何邊にか強健なる精神の宿るべきを象徴し、百萬石の爲めに氣虹の如きを吐くの趣がある。

板垣伯は准藩閥を以て明治維新に功を立て、後に自由主義を唱へて藩閥打破に與かり、其の功は前の功に優るとも劣らぬ。老本彌次郎君をして赤裸々に力を揮ひ、何の閥も能く妨ぐる無からしめたのは、偶然でない。伯は少くも此點に於て人を見るの明あるを證據立てる。龍野君に面白い趣味あることも此處で知ることが出来る。

大正六年十二月

雪 嶺 迂 人

### 卷首に一言す

(一)横綱太刀山は大正七年を以て力士界を退き年寄の列に入ることとなりました、私は渠が越中より出で、力士界に入つた當時より今日迄親しく交際して來ました緣故を以て、渠の隱退に際し紀念として其略歴を述べ、渠が十九年間愛顧を受けた内外の好角家に贈らしむる事にしました。

(二)尙此稿に對しては、渠を越中の田畝の間に見出して、今日の如き大力士たらしめた、板垣老伯に校閲を請ひ、又太刀山後援會幹部諸氏の檢校を受け、出來得る限り事實に錯誤なきを期しました。

(三)相撲の起源、歴史、故實、手合せ、協會の組織、現代史等は常陸山の著した『相撲大鑑』が詳密を盡してありますから、本書は専ら太刀山の略歴に止めて、此方面の記事を避けました。

(四)太刀山が土俵上に於ける取組の巧拙や、又四十八手の使ひ分け等の詳細は之を角力道に通せる文士諸君の論評に譲り、又太刀山と古今大力士との比較論の如きも、最負の強き私等が之を評せんよりは、寧ろ冷靜なる局外者の月旦に待つので得策なるを思ひ特に之を避けました。

(五)二三友人の熱心なる注意に依り婦女子、小兒にも解し得らるゝやう文字は通俗平易を



旨として書き綴りました。

(六)私は本年八月二十八日の夕、三十七年間苦樂を偕にした糟糠の妻に逝かれまして、其二七日の法要を了り三七日の逮夜に至るまでの間、亡妻の靈前に香を炷き、來弔の友人に應接しつつ、此稿を認めました、それ故、心、言はんと欲して筆及ばず、辭、盡さんとして文件はず、天下の大力士たる渠の佛を描くに於て遺憾極めて多く、又調査不備の點もありまじやう、此等の是正は偏に他日文陣の雄師にして、渠が詳傳を編まんとする人々に托する考であります。

(七)要するに今後益太刀山の如き、若くは渠以上の大力士輩出して、我が國技の精髓たる斯道を隆盛ならしめやうと希ふ微衷が此に至つたのであります。

大正六年九月十七日

東京市麻布區新龍土町の僑居に於て

龍 嘯 雨 記 す

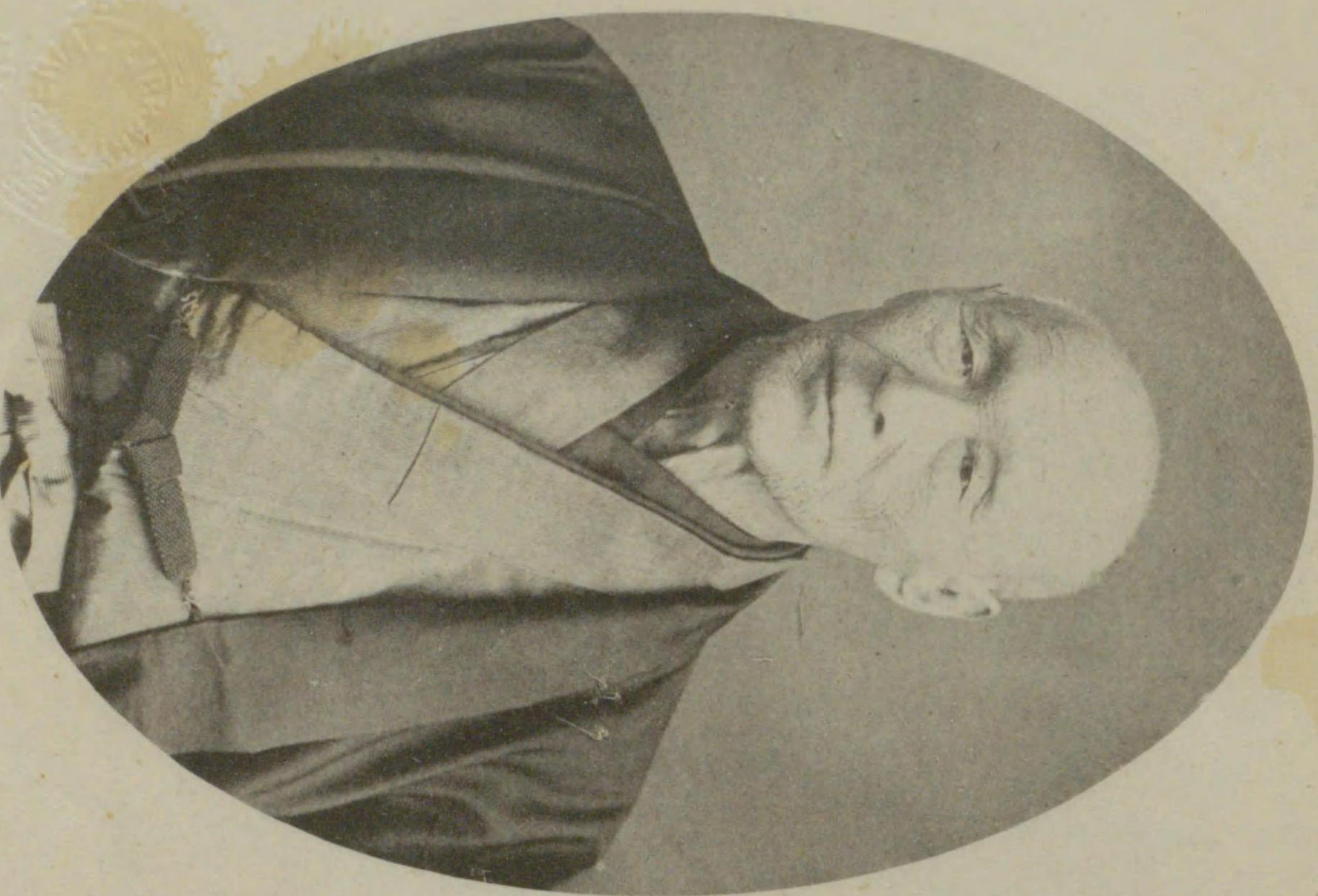


板垣伯

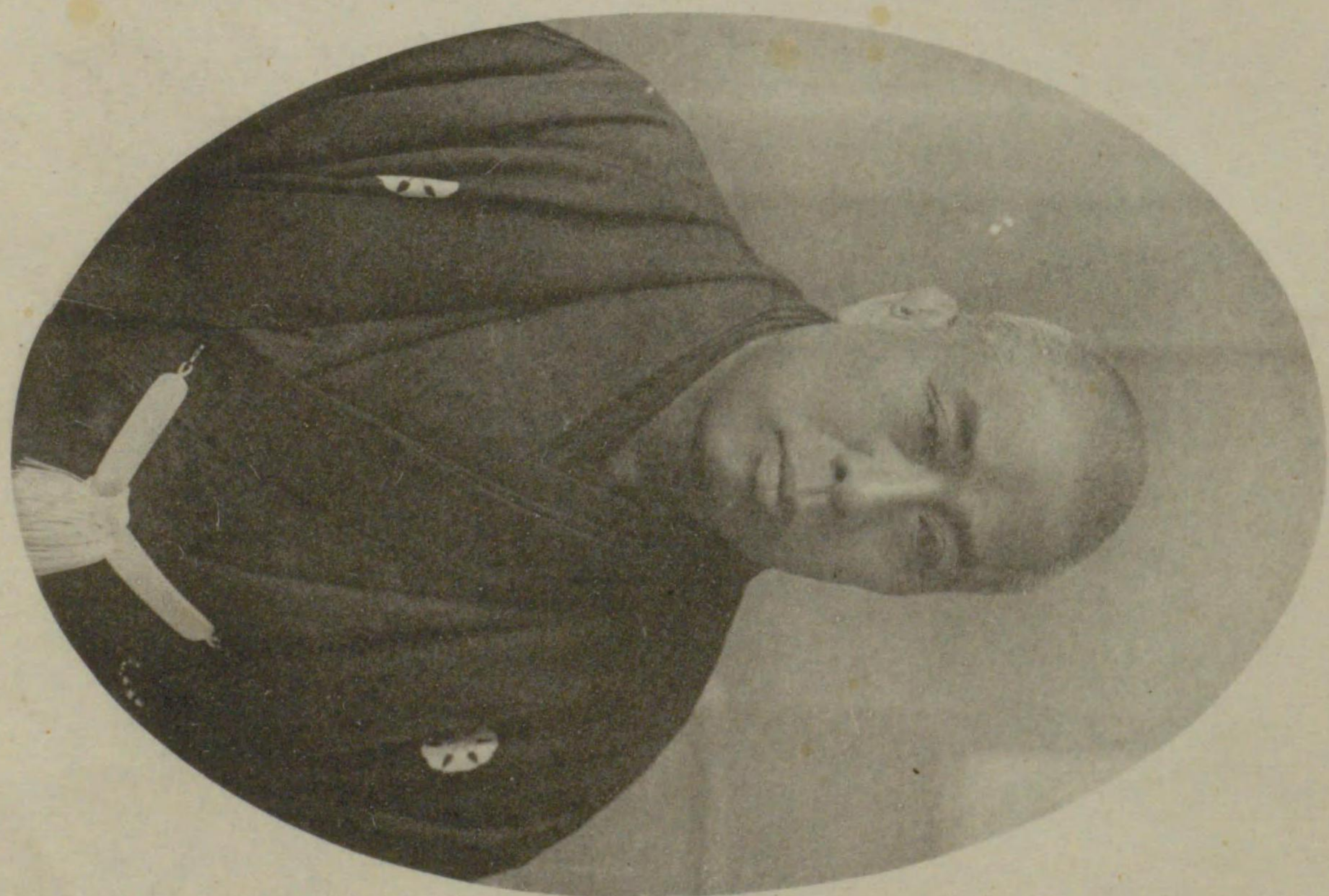




侯郷西故



影撮の歳十八翁助治本老父



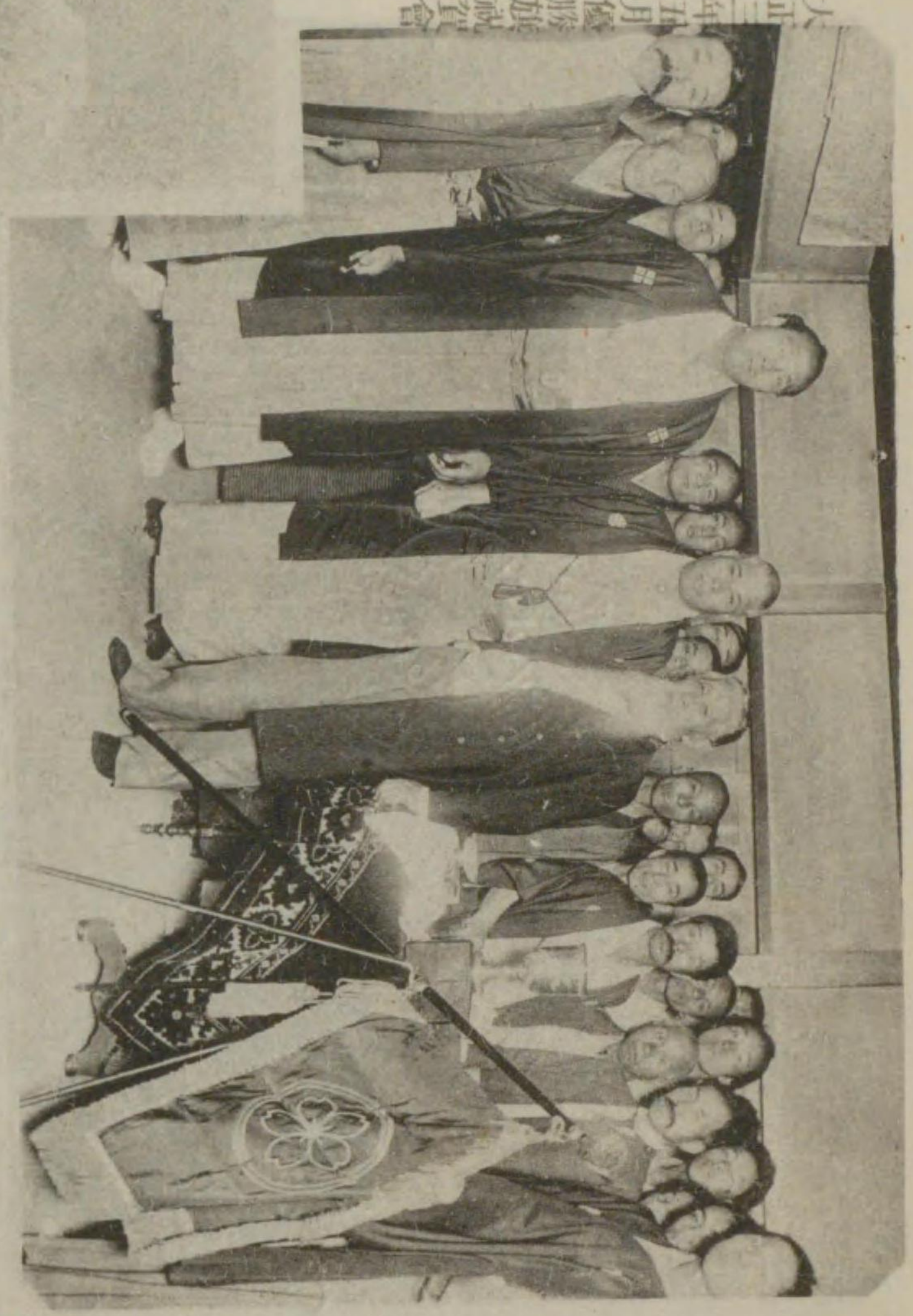
氏郎太貞綱友匠師







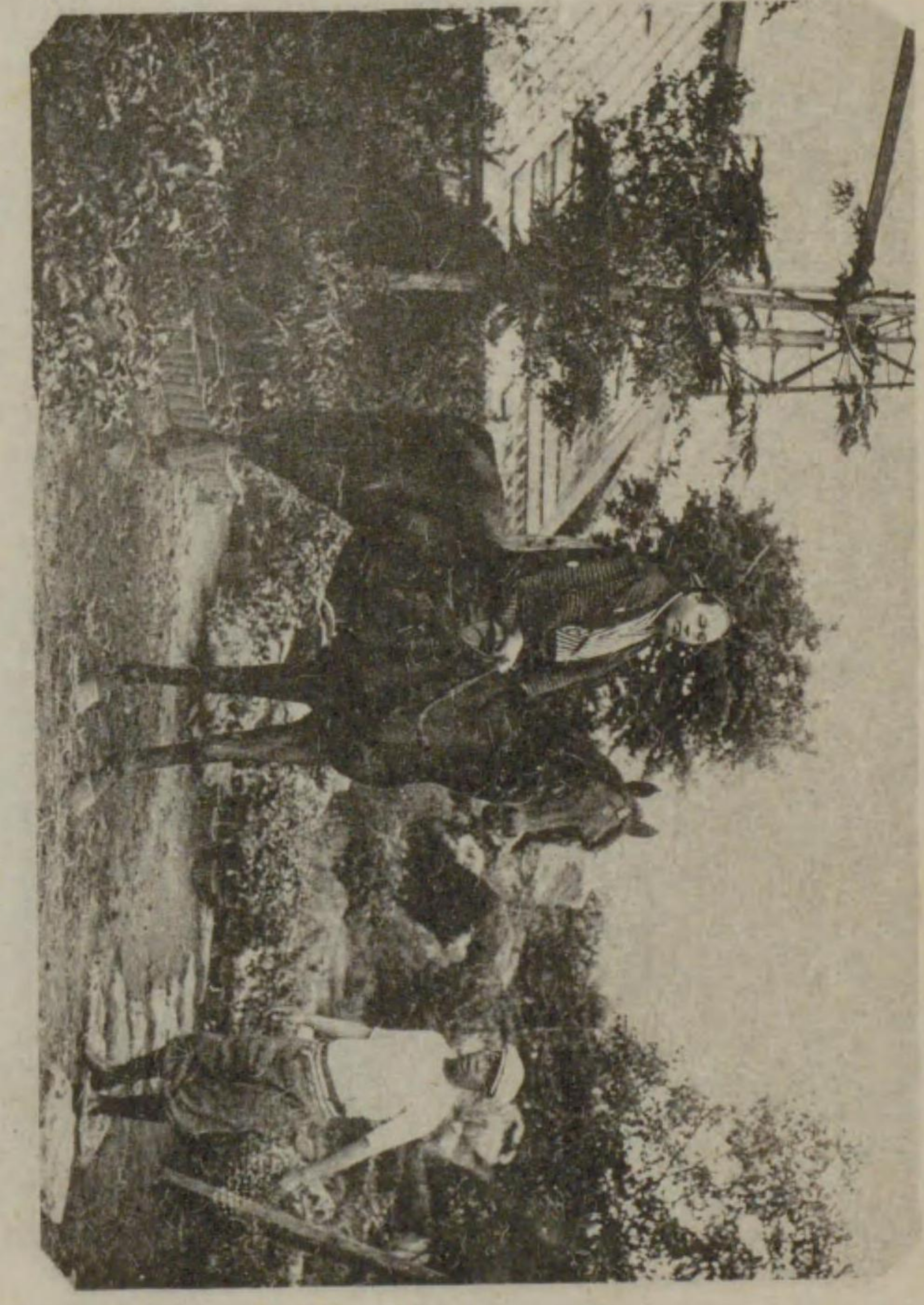
大正五年五月優勝旗授賞式



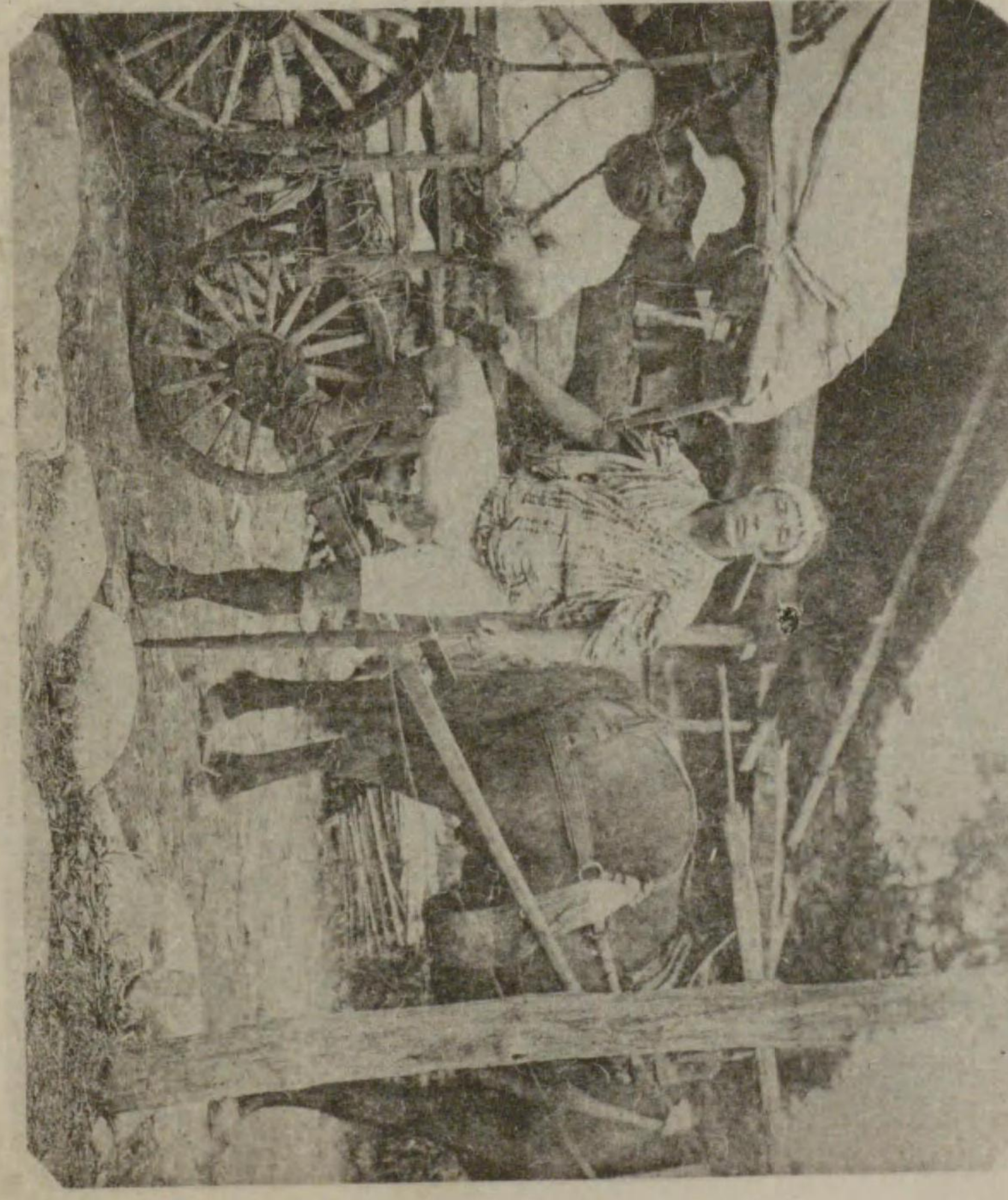
士富るけ嵩



描を士富へ於に張書

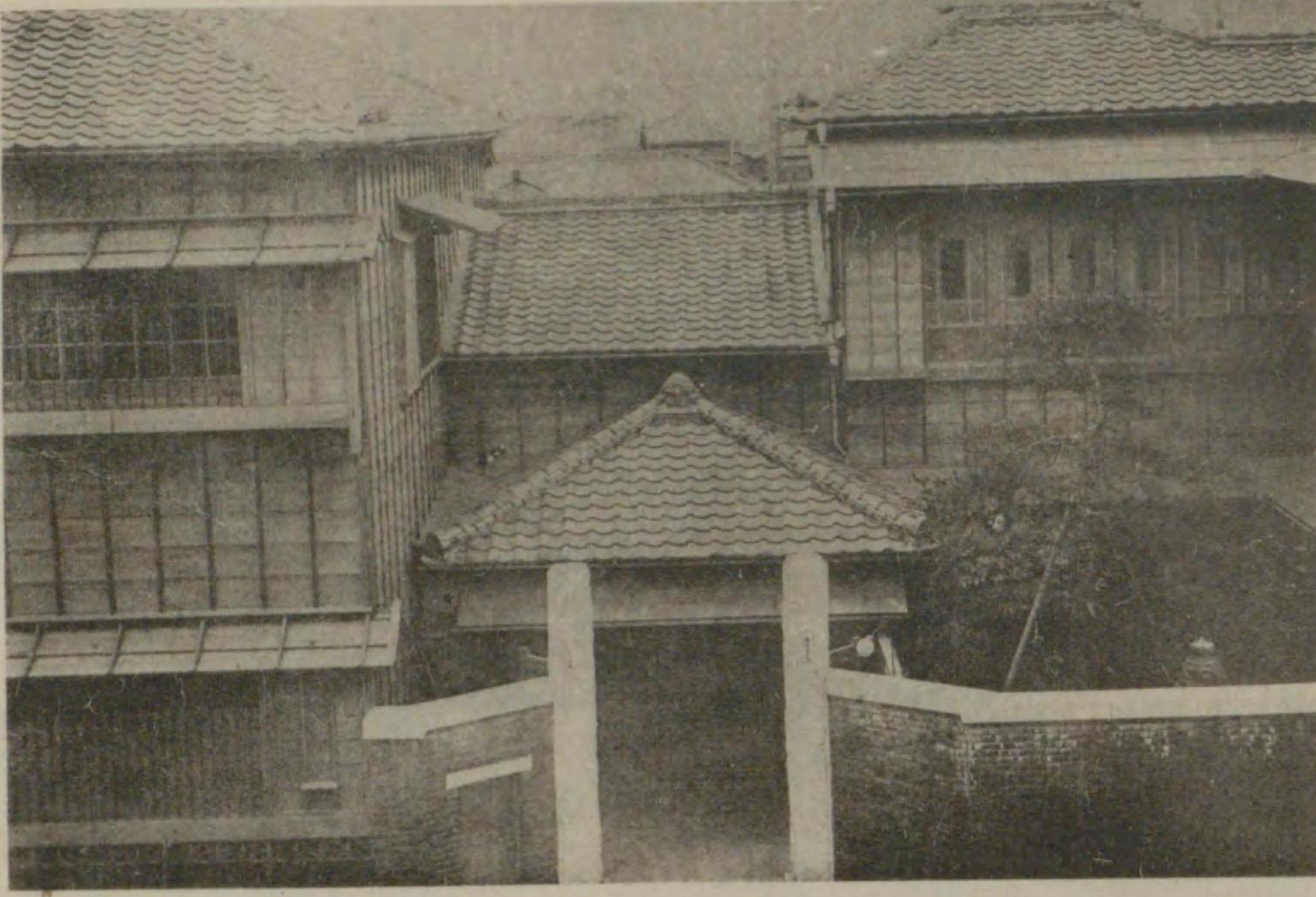


佐藤醫學博士邸内に於馬姿

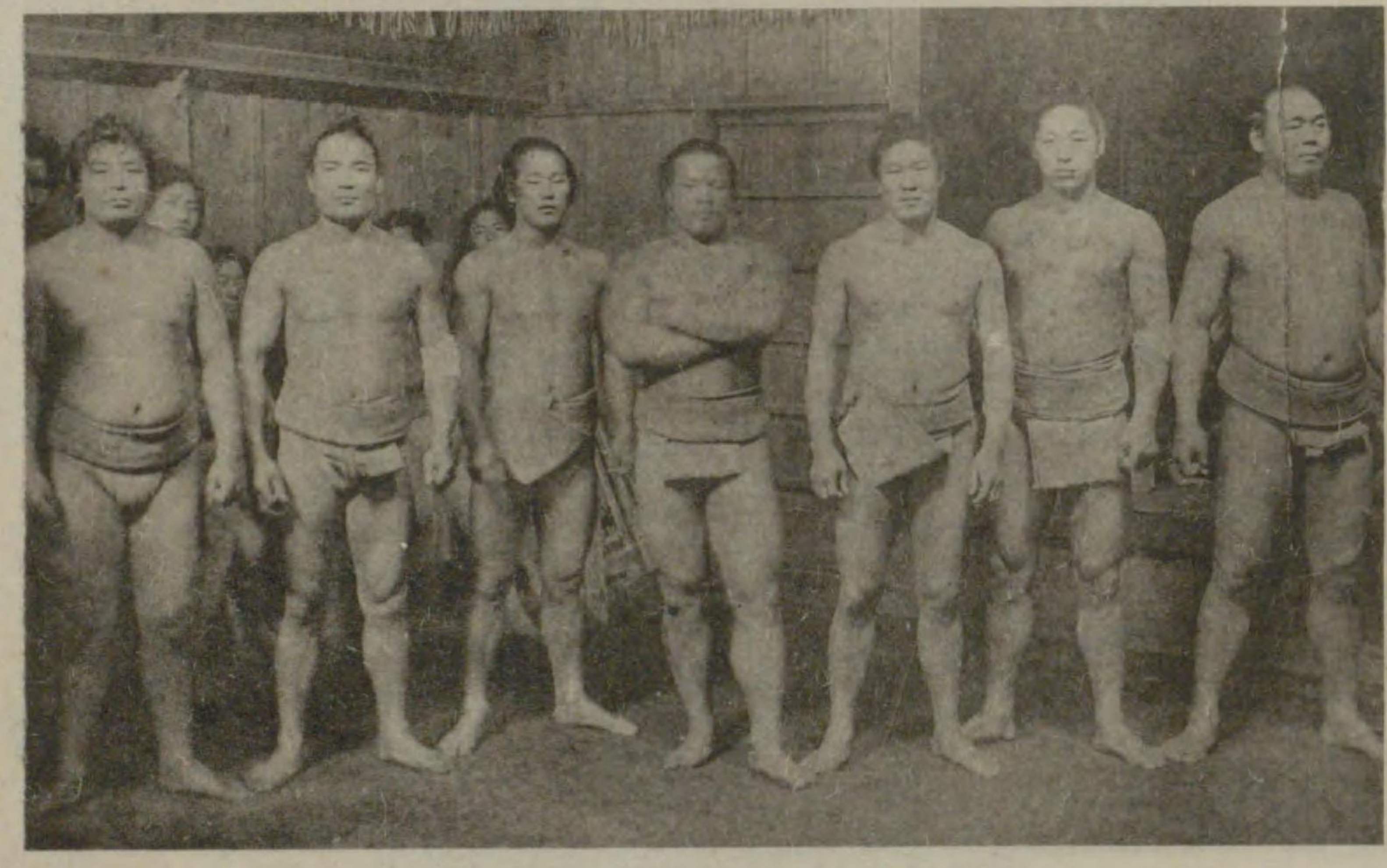


大正五年飛騨高山より途中へ赴く途中にて  
荷馬車上の太刀山

東京市本所區小泉町太刀山の住宅門前

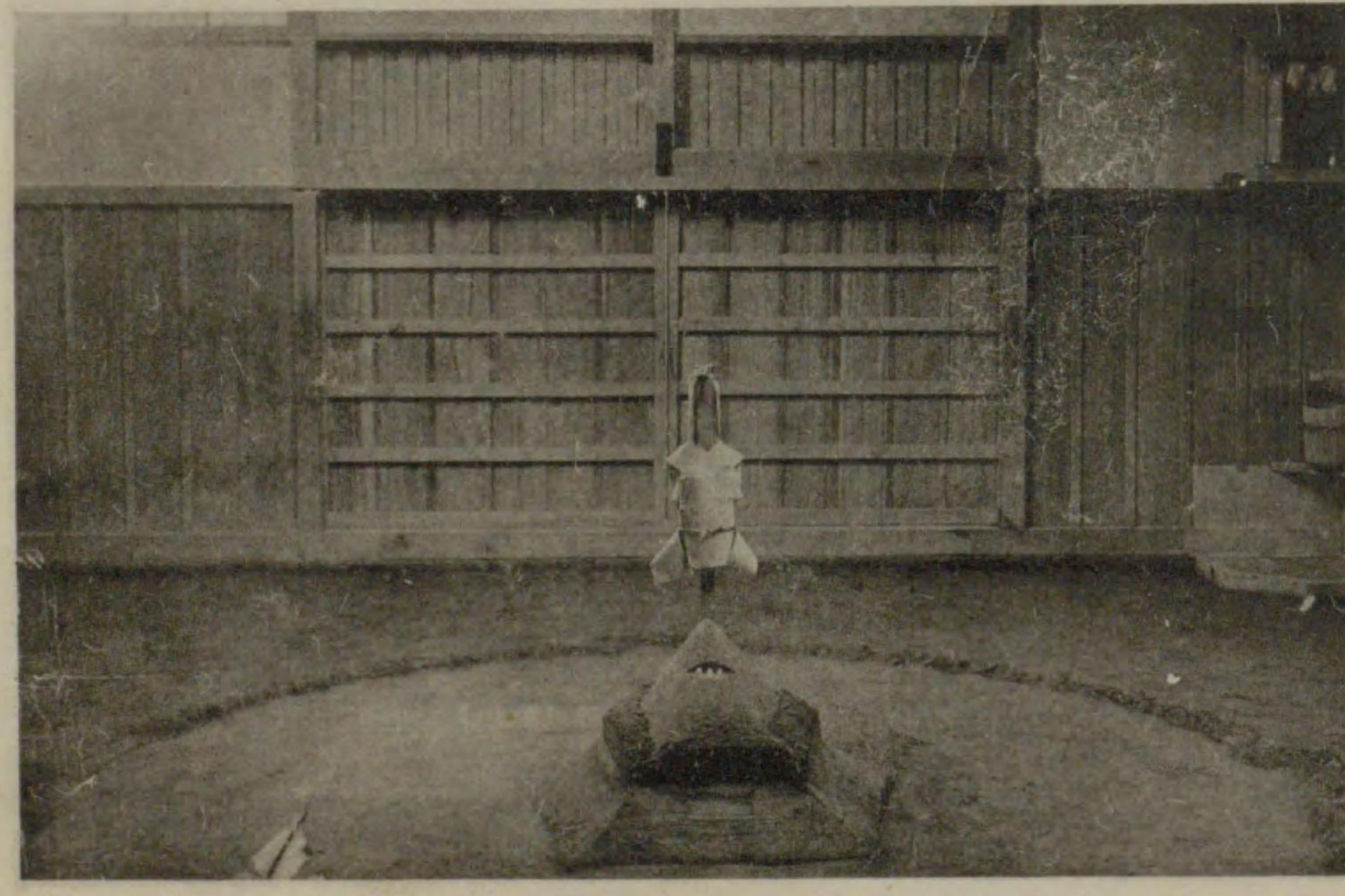


友綱太刀山兩部屋力士



右ヨリ  
太刀山 黒瀬川 鏡川 伊勢濱  
土州山 太刀の音 寒玉子

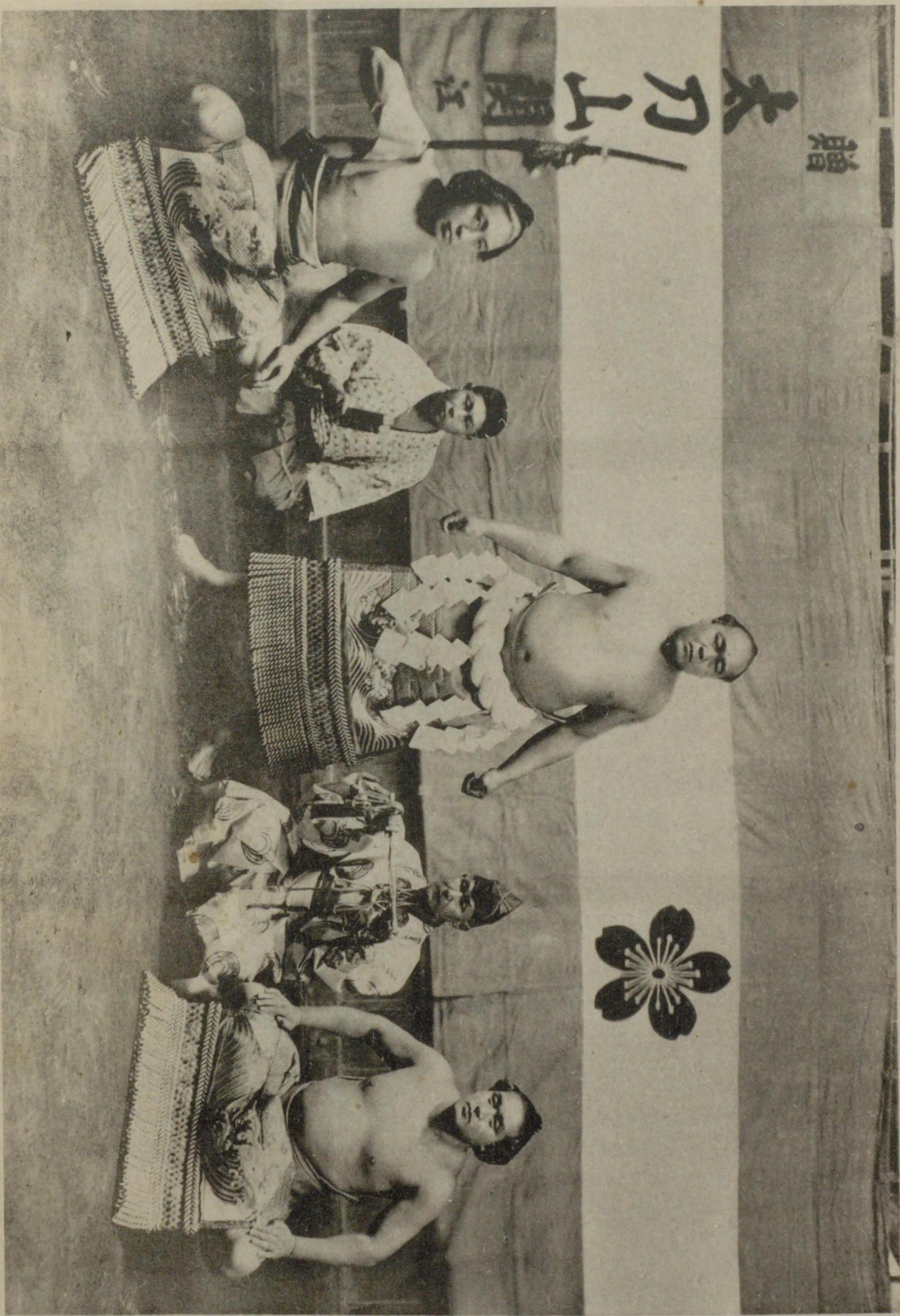
太刀山の稽古場







像肖額勝優回一第(關大正)所場月五年三十四治明



川瀨 持刀太 吉 清 世呼 久 俵 土 綱 横 脚之庄村 木 司行 島 敷 掃露





像肖額勝優回三第(綱横正)所場月五年四十四治明



像肖額勝優回二第(關大正)所場月一年四十四治明





像肖額勝優回五第(綱横正)所場月五年五十四治明



像肖額勝優回四第(綱横正)所場月一年五十四治明



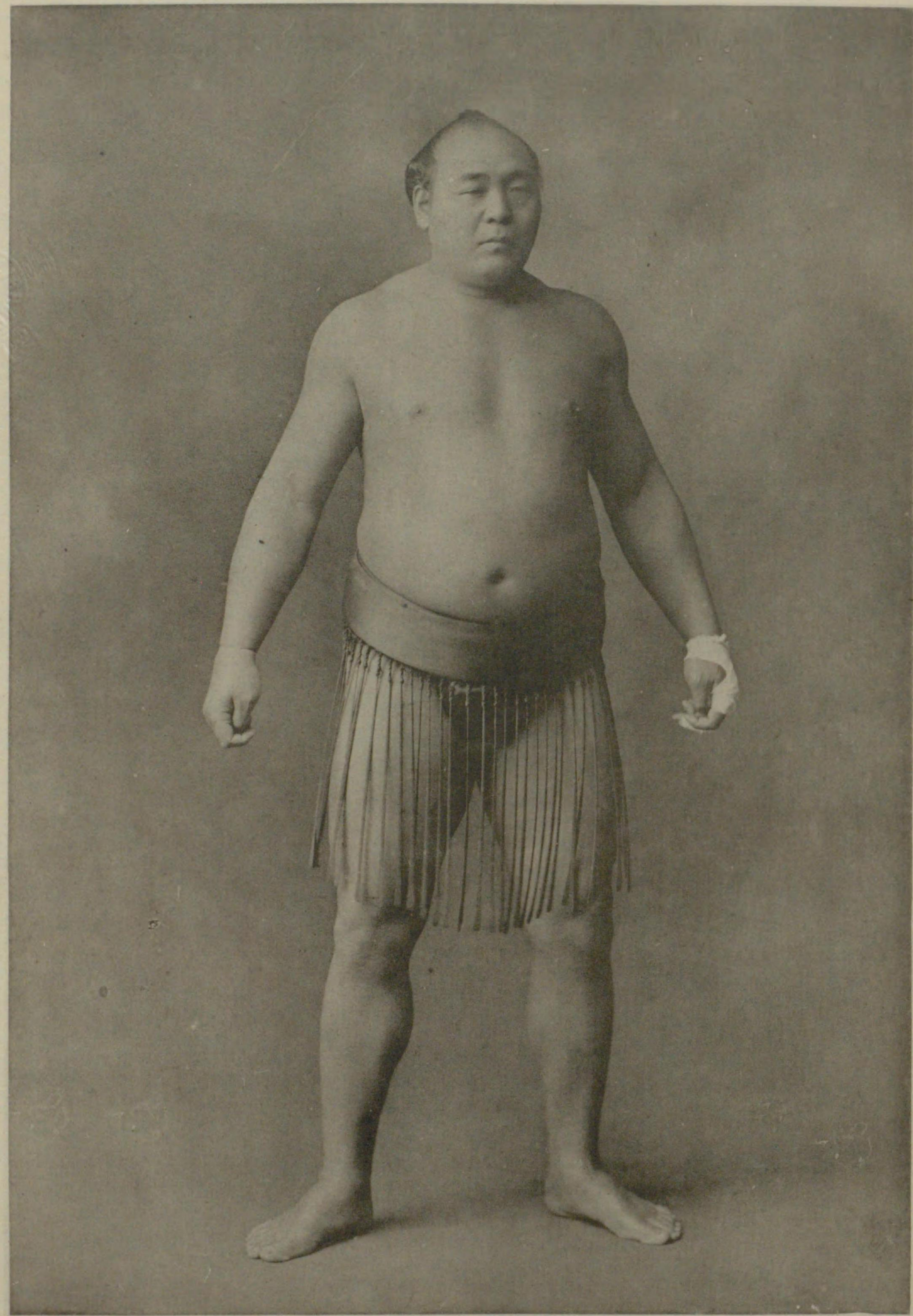


大正三年一月場所(正横綱)第七回優勝額肖像



大正二年五月場所(正横綱)第六回優勝額肖像





像肖額勝優回九第(綱横正)所場月五年五正大

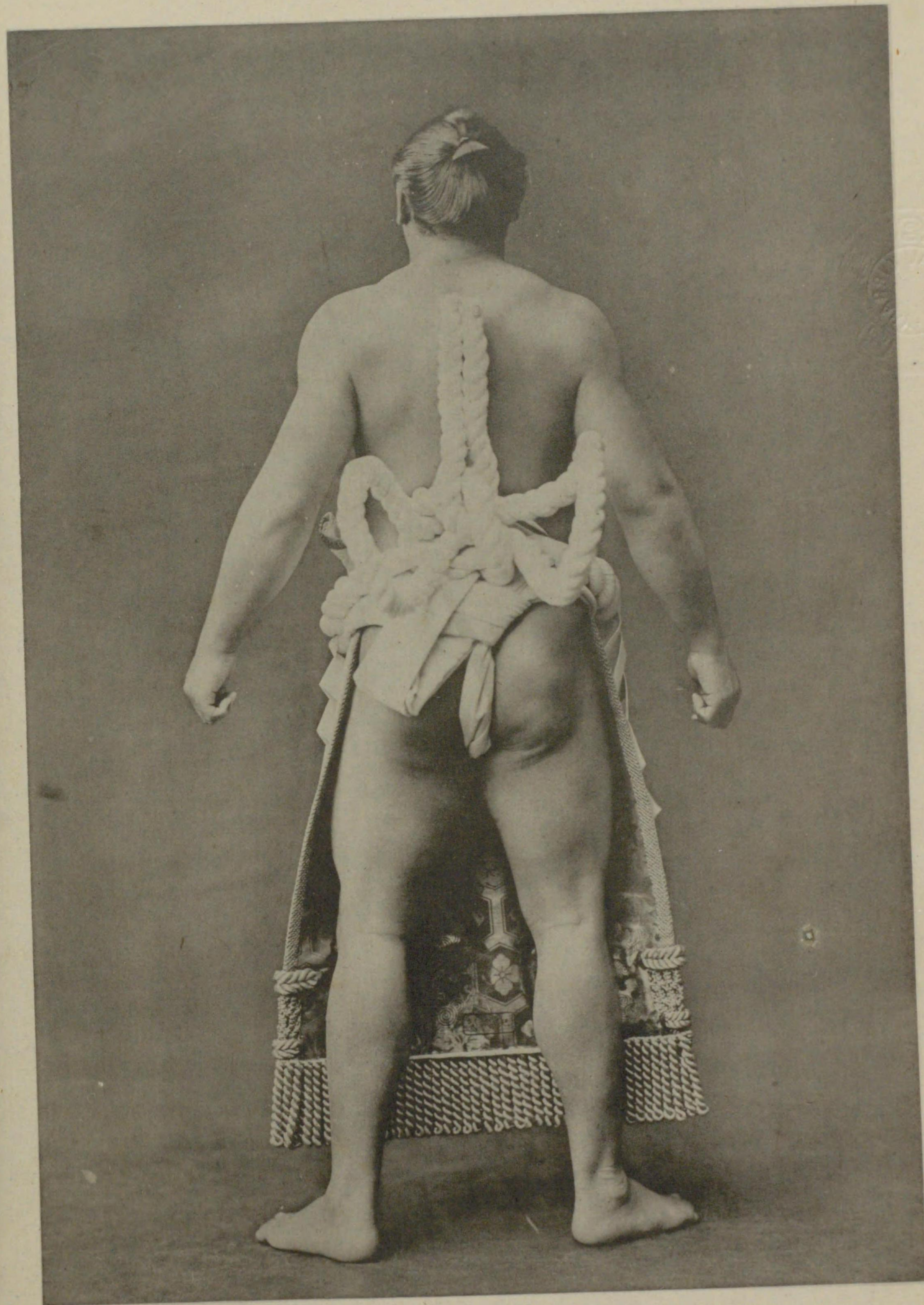


像肖額勝優回八第(綱横正)所場月五年四正大





へ構るす退撃を敵てに砲鐵の意得山刀太



姿後の山刀太綱横



横綱免許状

# 免許状

越中國人  
太刀山峰右衛門

右者依相撲多位横綱令授與  
畢以來方屋之節追相用可  
申候依而免許状如件

本朝相撲司御行司

第二十三世

明治十四年  
十月二十四日  
吉田追風

相撲故實門弟に差加へられし證狀

# 證狀

越中國人

太刀山峰右衛門

右者相撲故實門弟に  
差加之候仍而證狀  
如件

本朝相撲司御行司

第二十三世

明治十四年  
十月二十四日

吉田追風

方屋入之節太刀を持すべき免許状

# 免許状

越中國人

太刀山峰右衛門

方屋入之節太刀持立願  
尤門人之外裸三同揃踏  
致間敷候依而免許状如件

本朝相撲司御行司

第二十三世

明治十四年  
十月二十四日

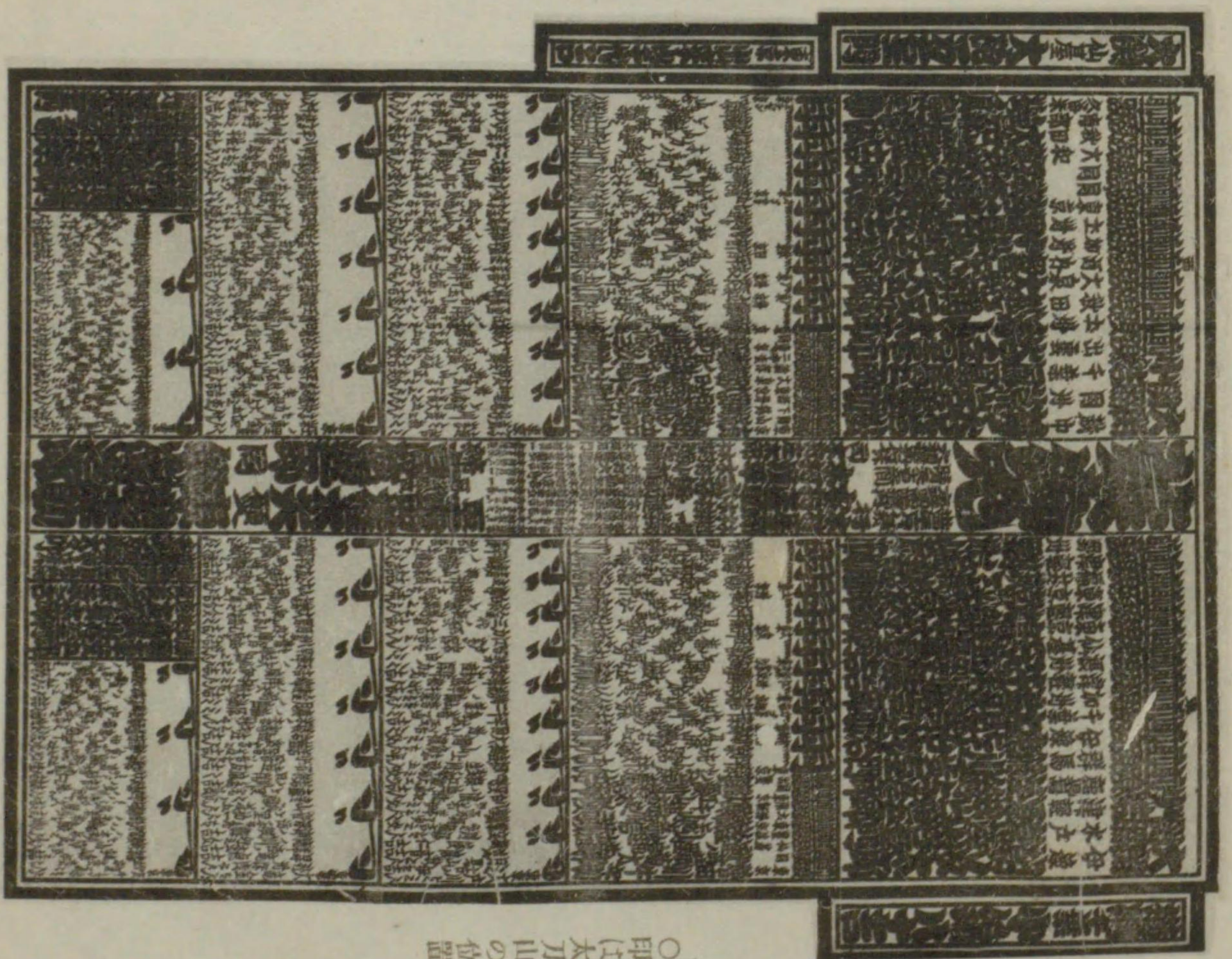
吉田追風



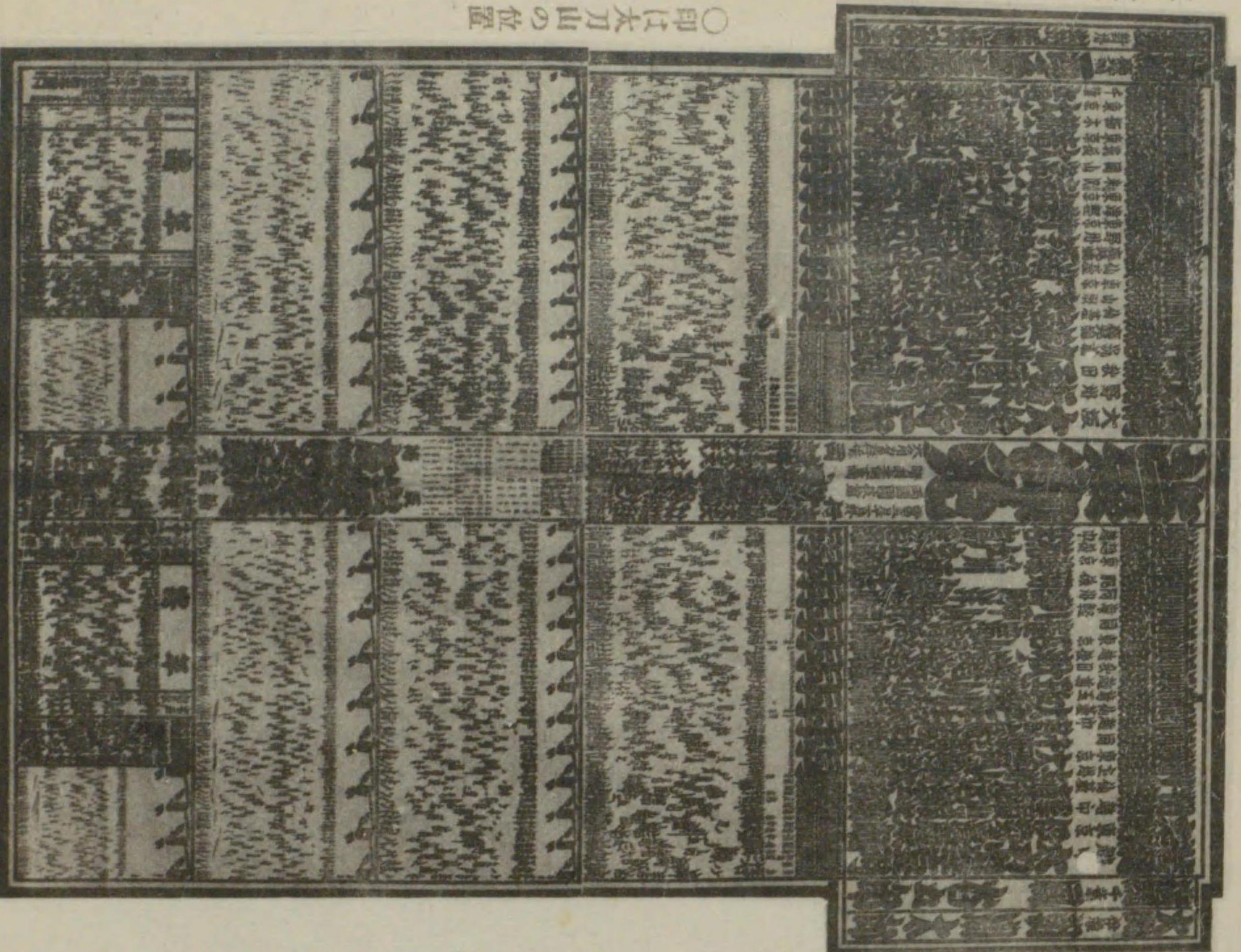


形手の山刀太





大正六年五月番附  
○印は太刀山の位置



○印は太刀山の位置

大正六年五月番附

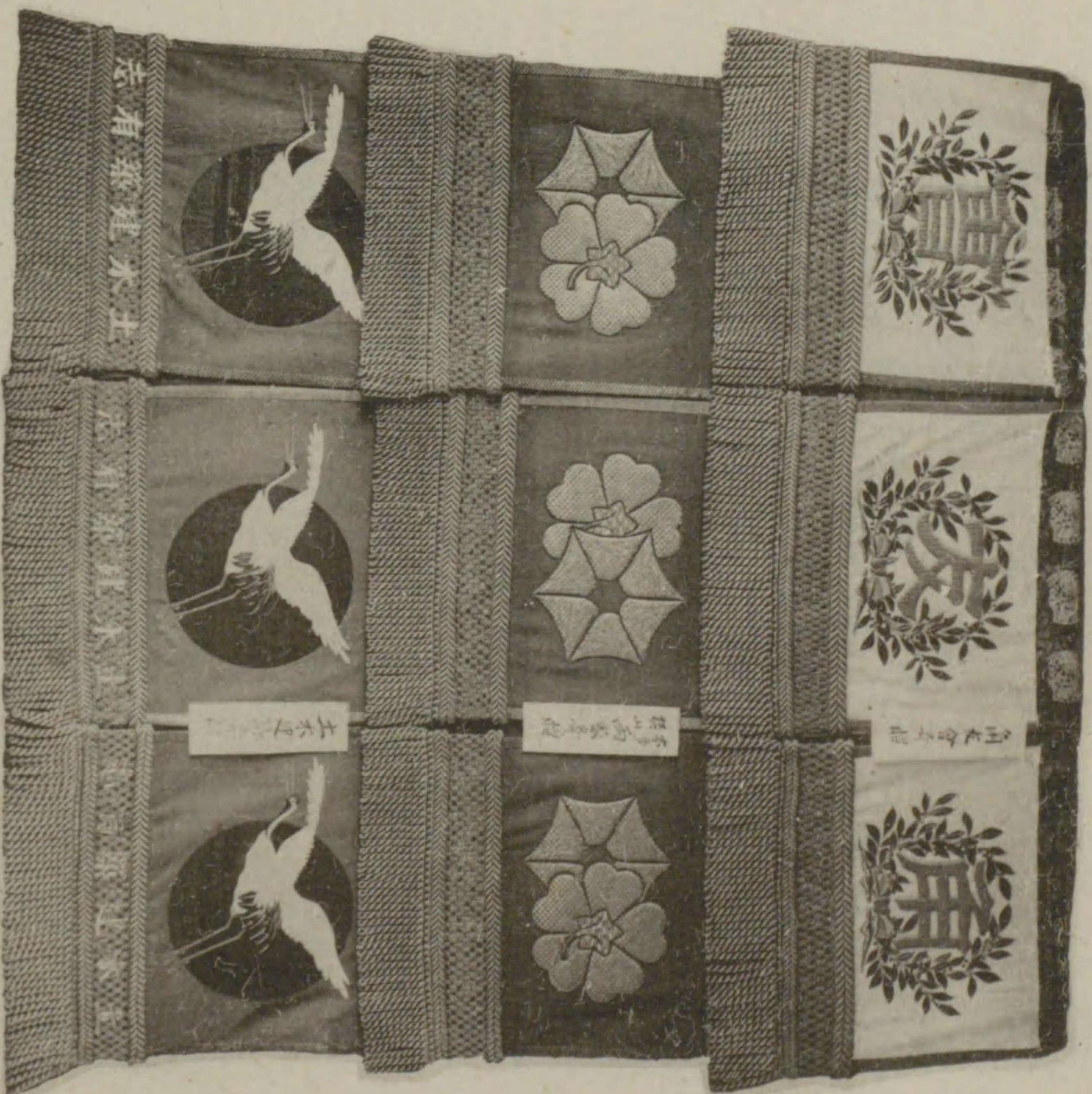




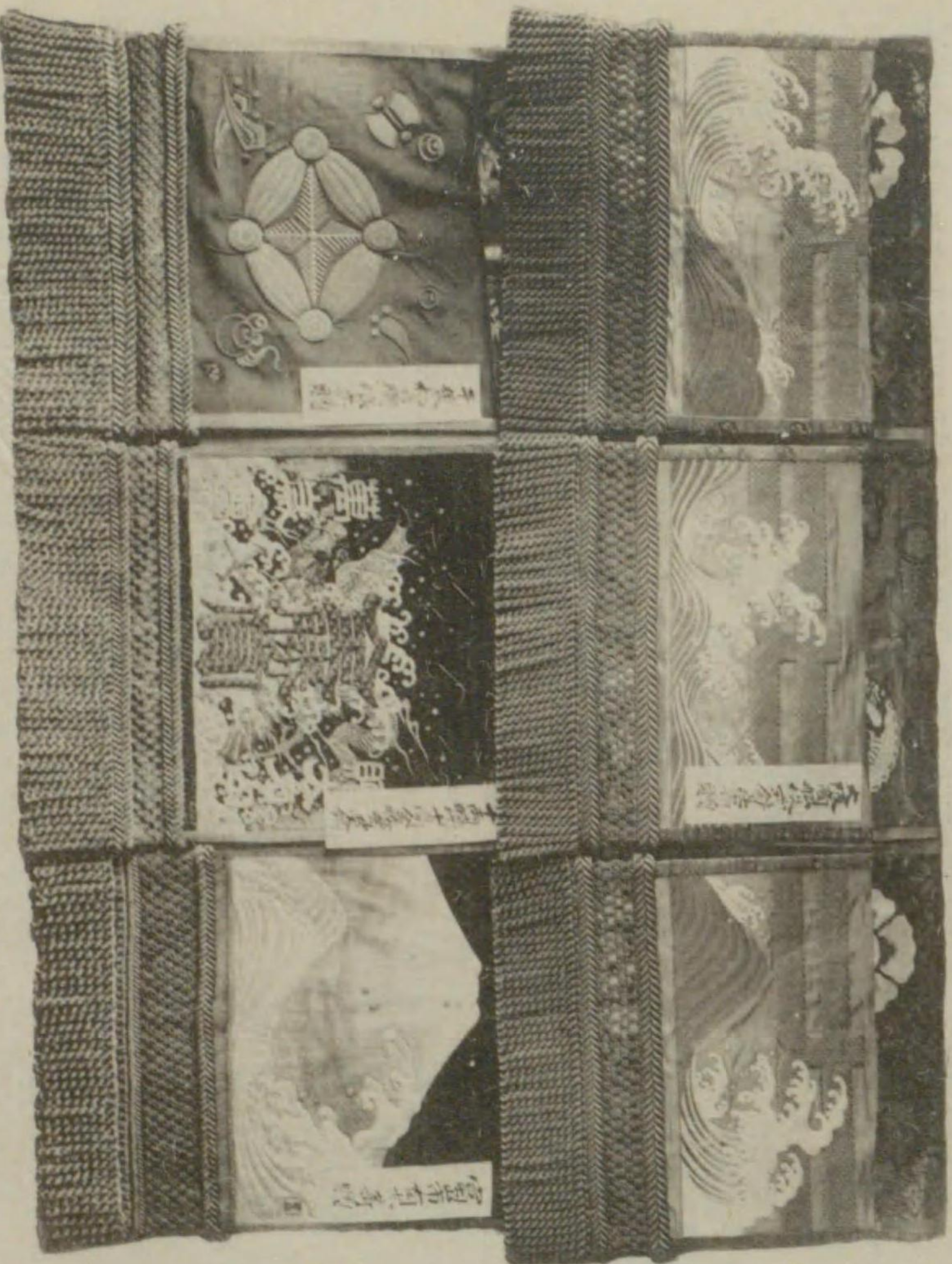




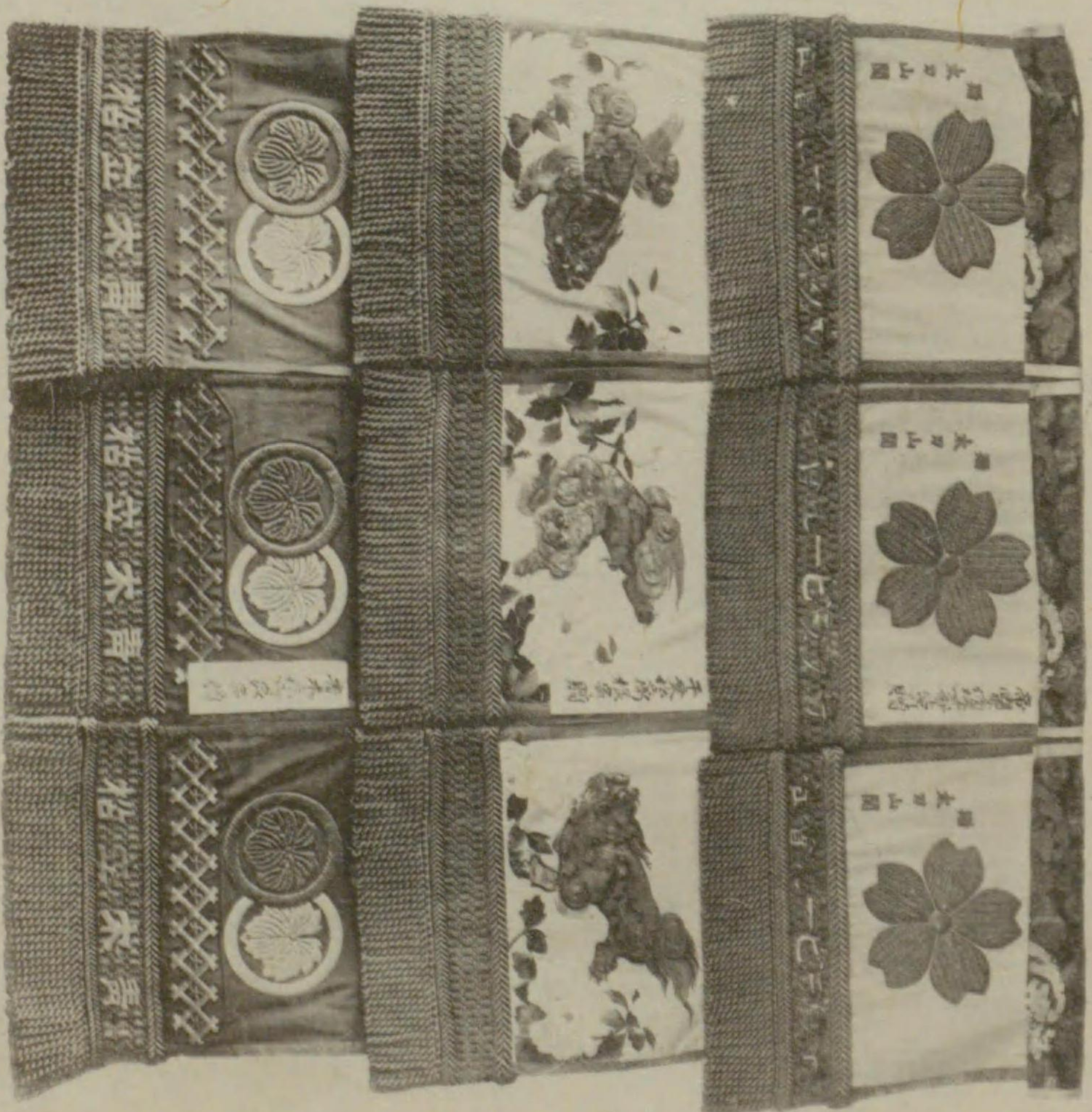
組 三廻粧化  
樓月得知高  
志有縣山富  
組 井杉



組 三廻粧化  
會友角上  
家剛氏山樞、多本  
志有築建木土京東



枚三分の前以網横及組一廻粧化  
組一贈寄の社會式株船商販大上  
會成萬廻勝全の代時兩十中、志有市山富千左  
贈寄りよ氏衛兵松葉干左



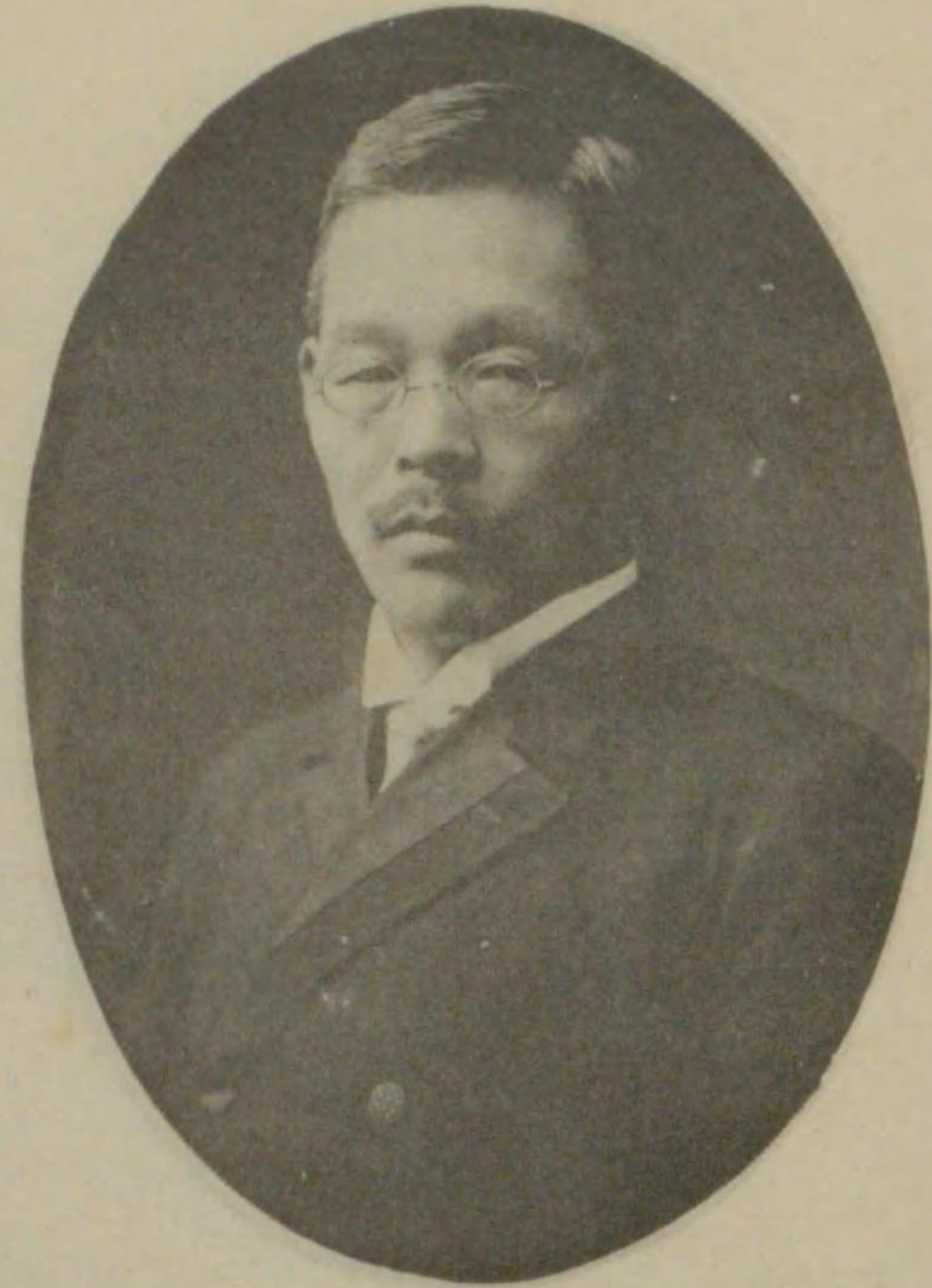
組 三廻粧化  
贈寄の社會式株酒麥國帝上  
贈寄の氏衛兵松葉干中  
贈寄の志有原田小下



太刀山會幹事の第一



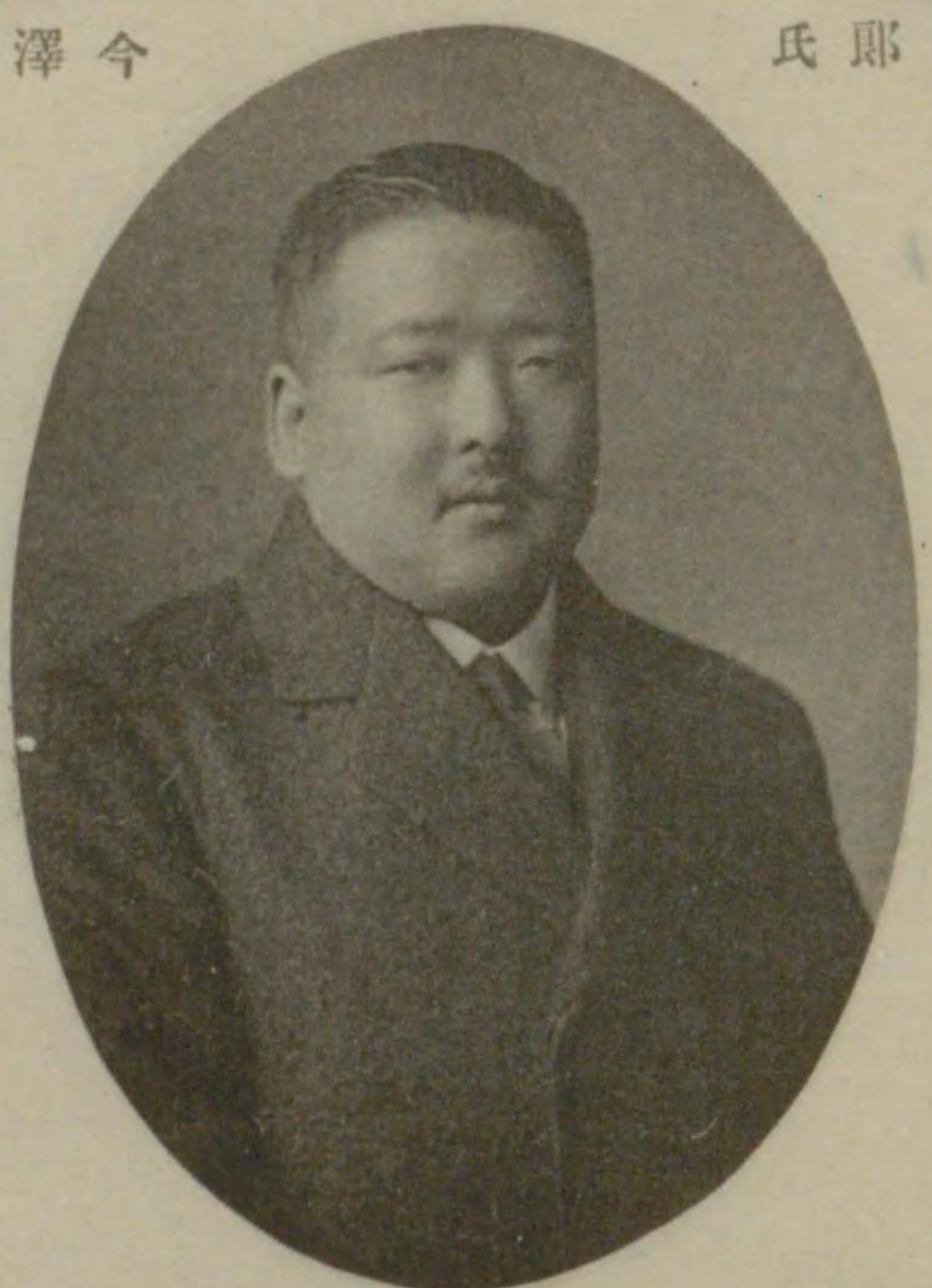
今澤則次氏



池田寅治郎氏



大野清敬氏



千葉恒次郎氏



林美哲氏



葛西虎次郎氏



川崎吉郎氏



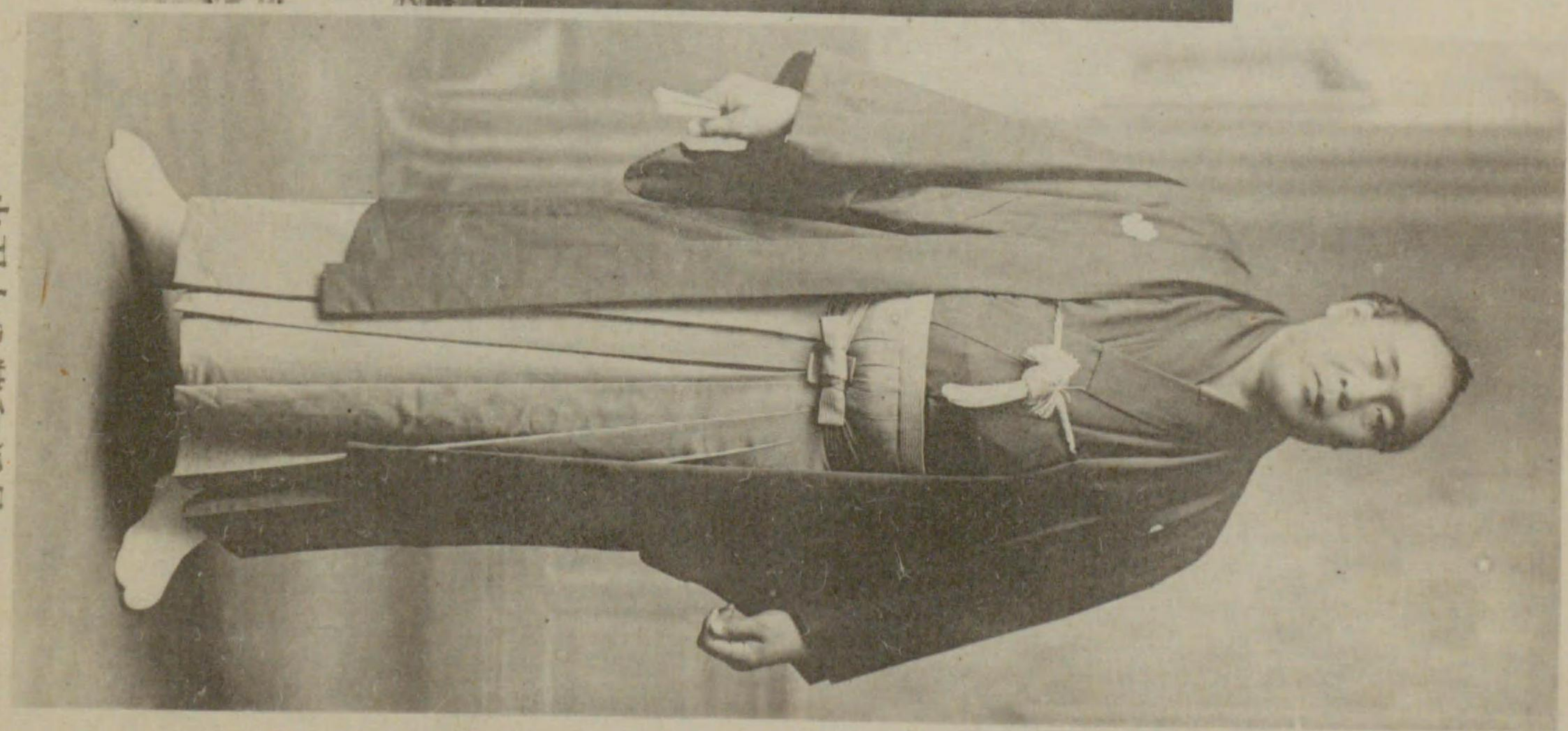
(歳八)子峰女次

(歳二十)子花女長

(歳二)助之辰男長

(歳八十三)子らと妻

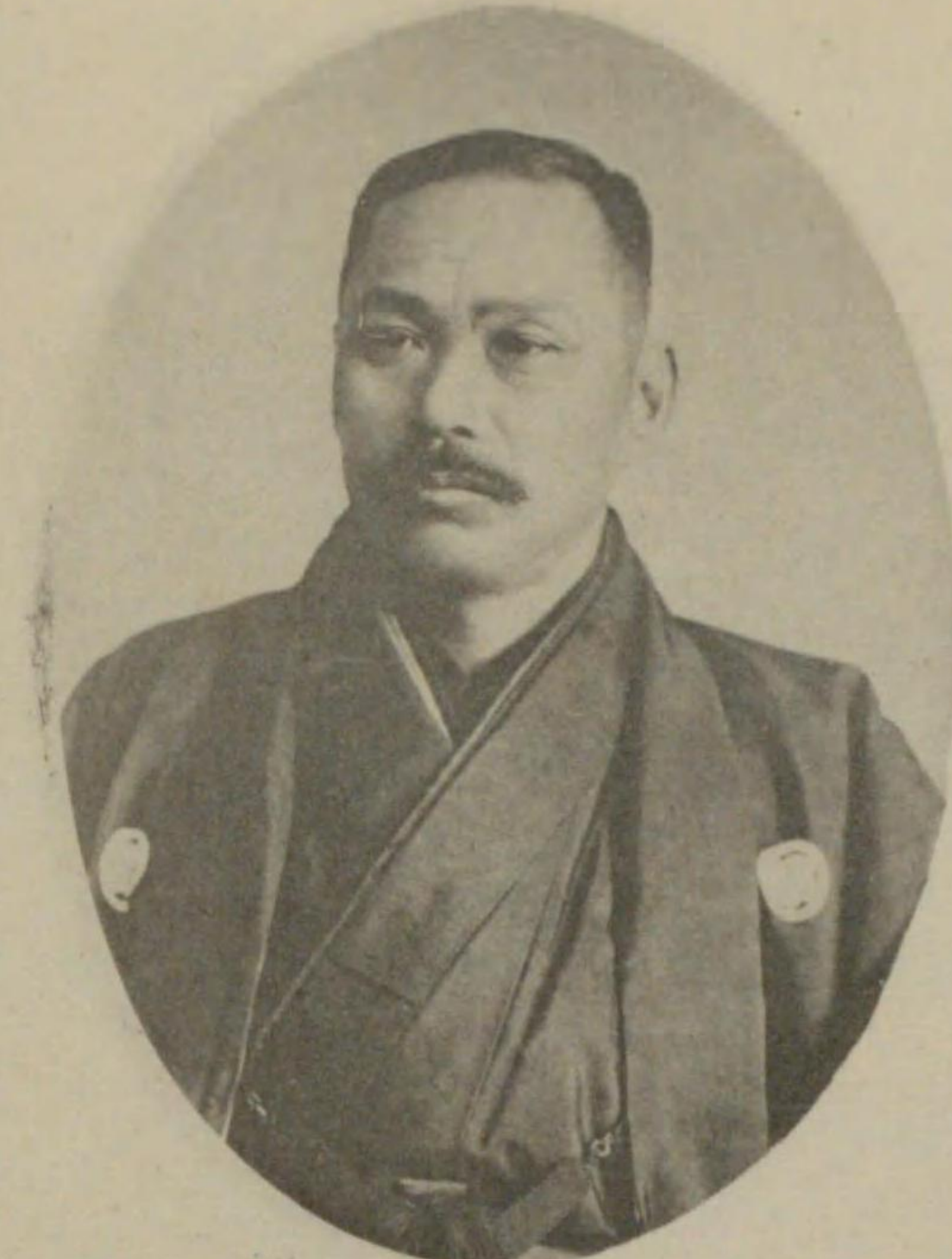
太刀山の家族



最近の太刀山の装

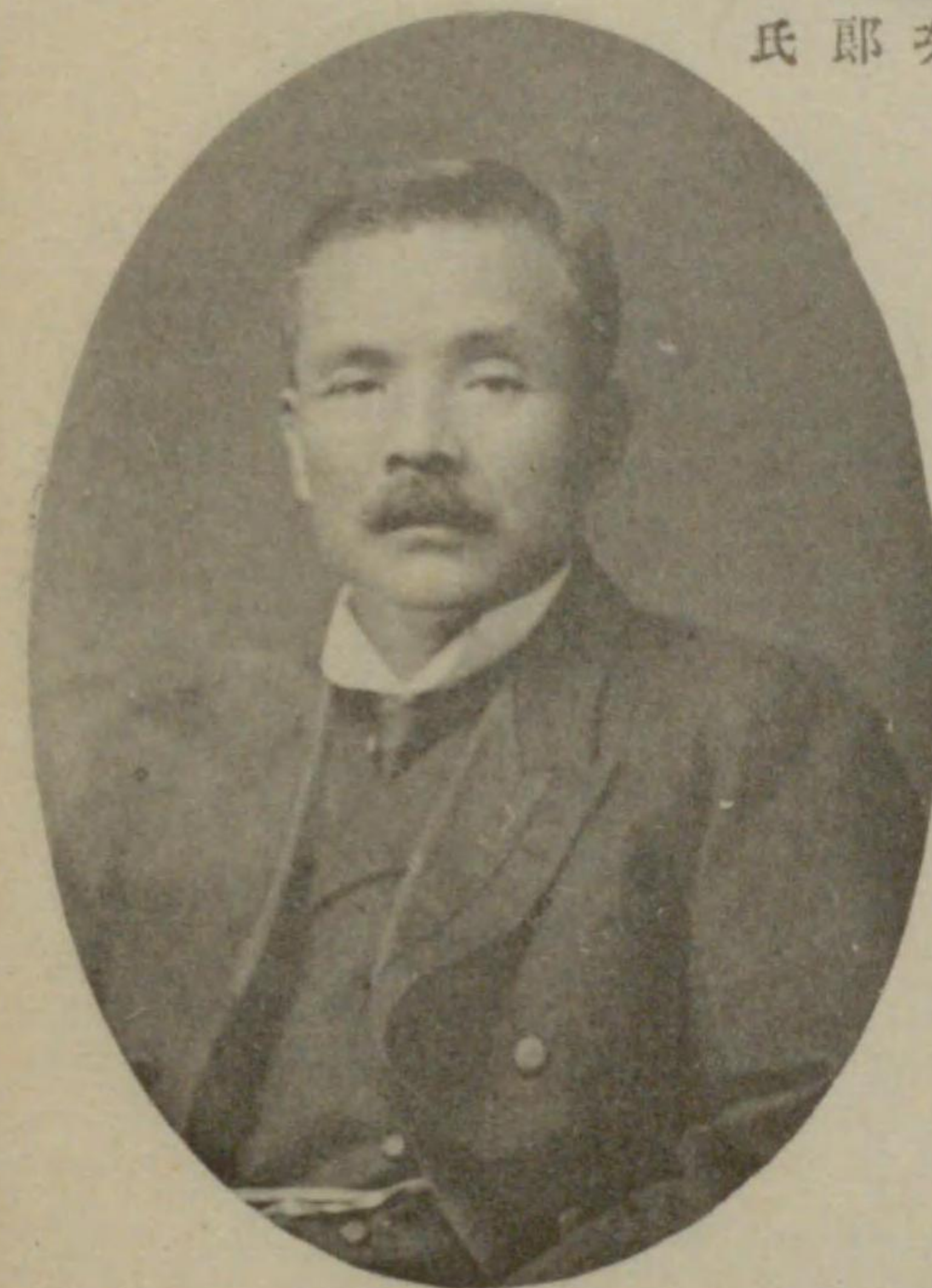


太刀山會幹事の二

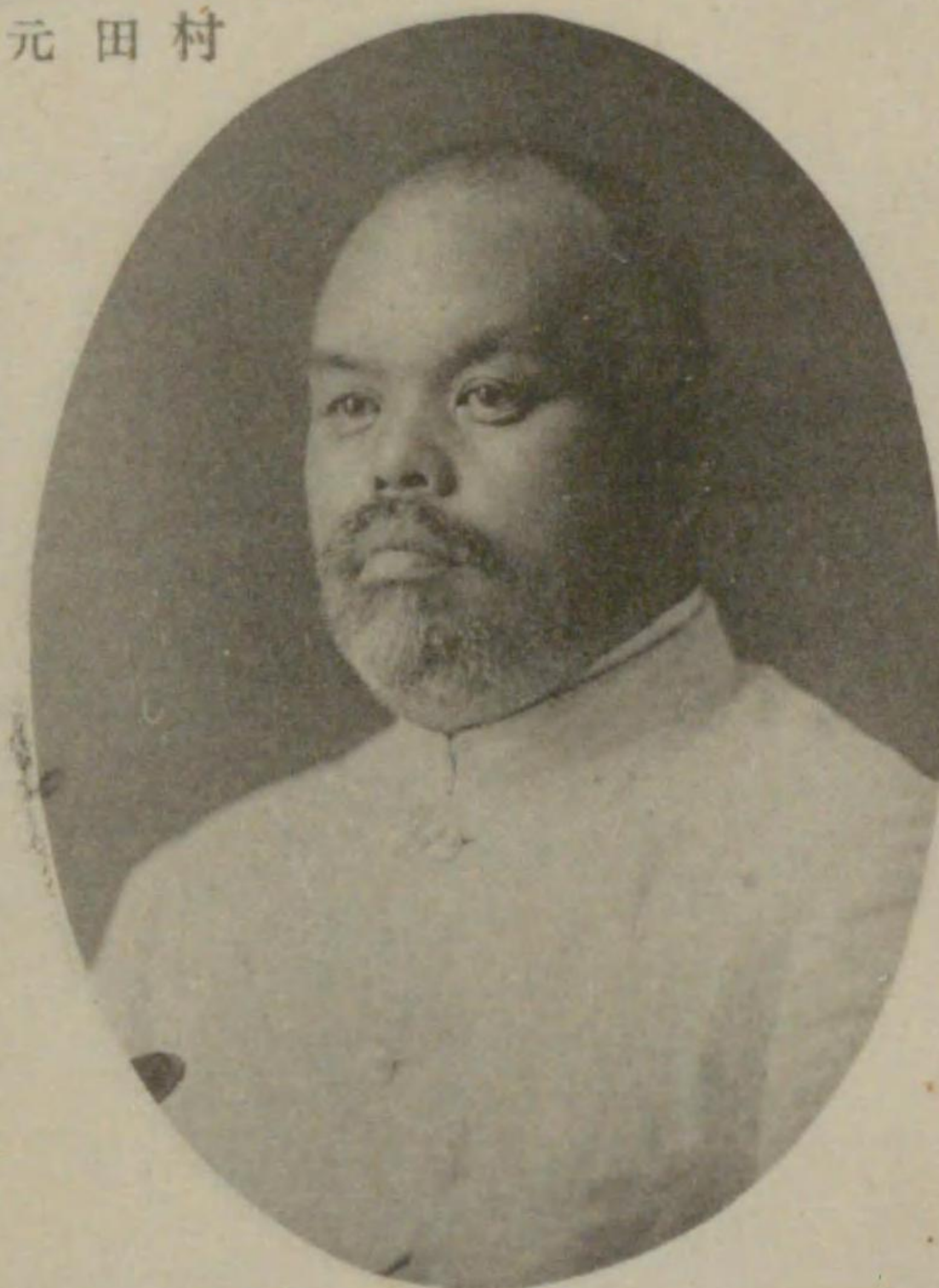


玉村勇助氏

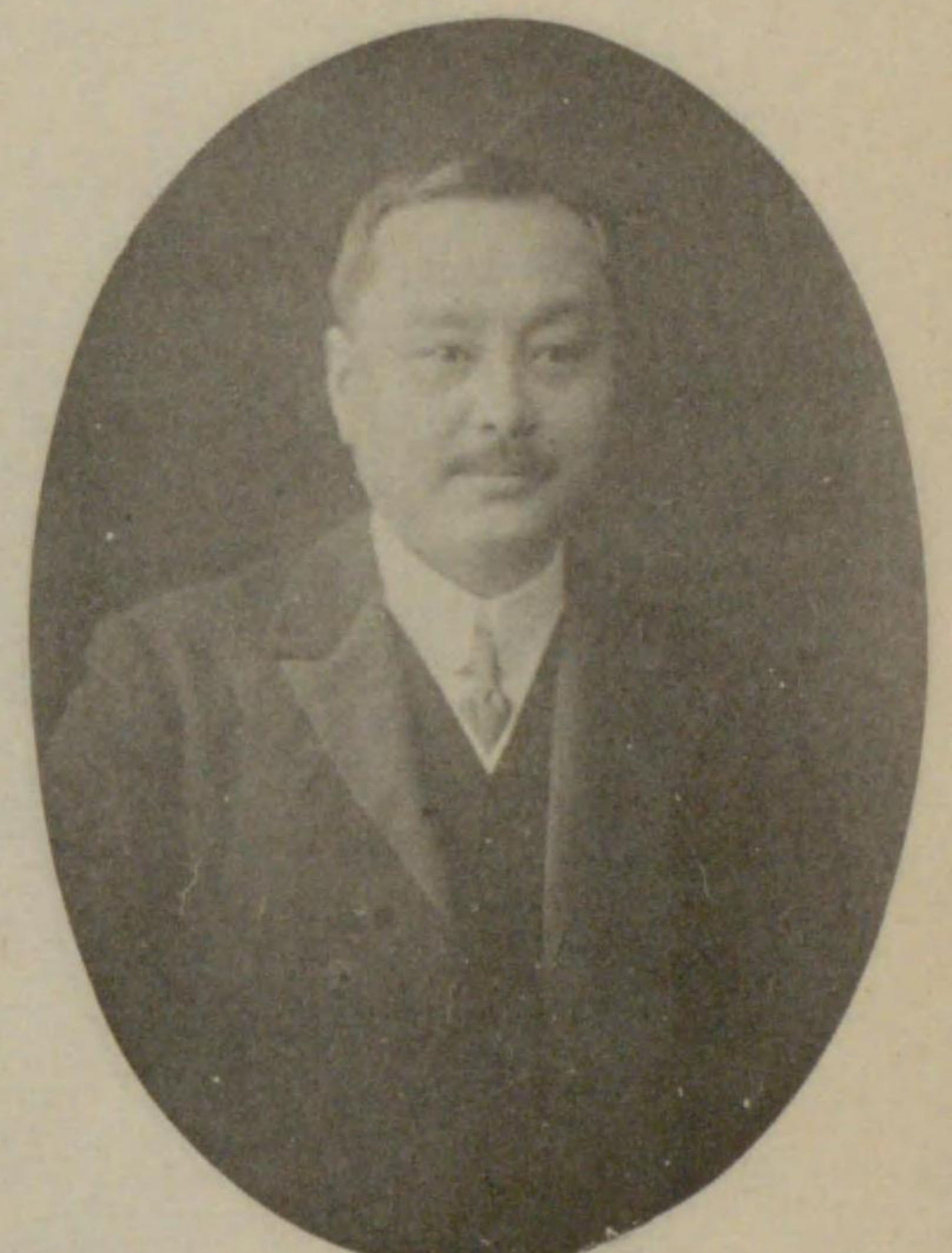
村田元次郎氏



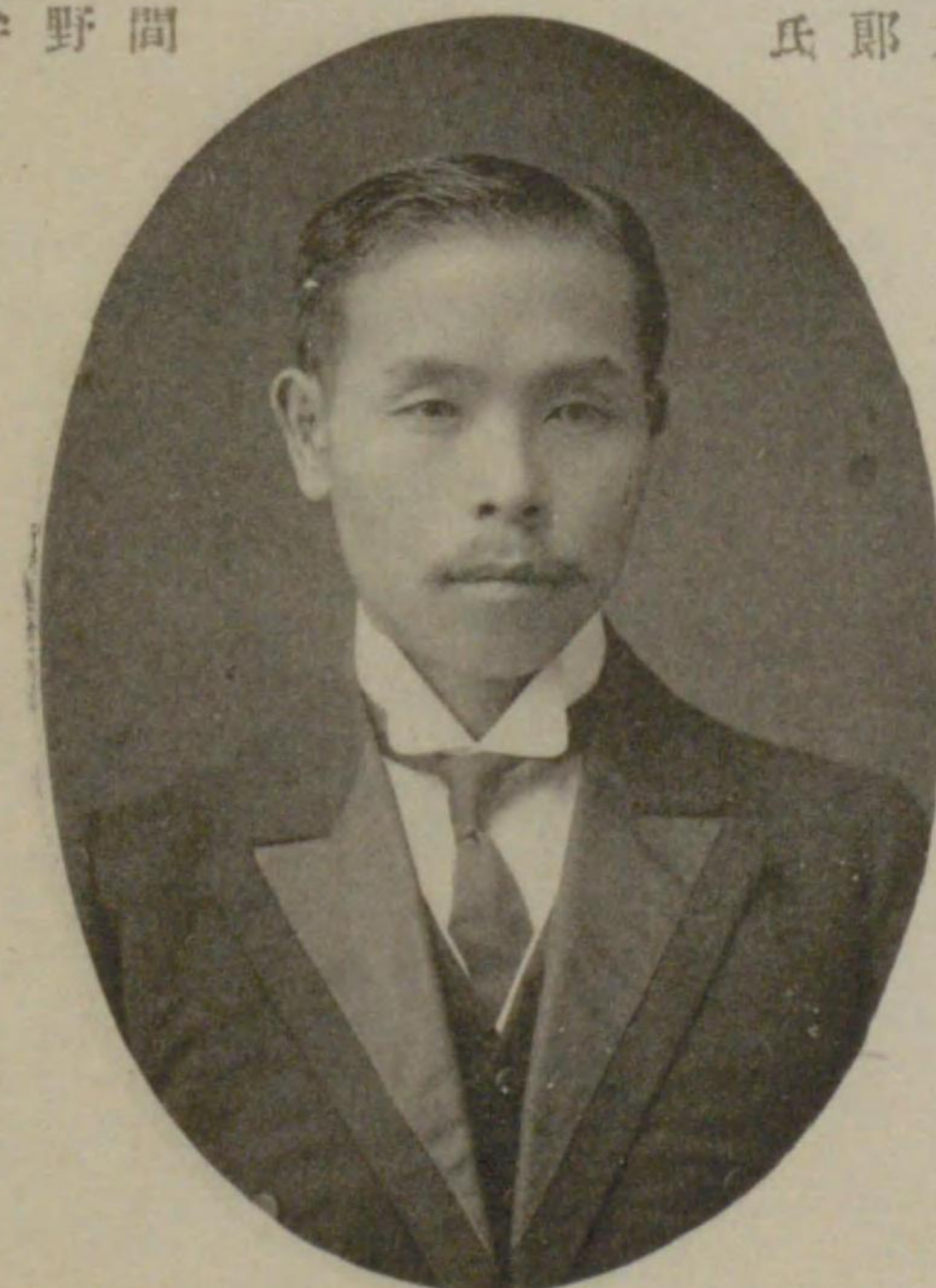
間野半三氏



山岡順太郎氏



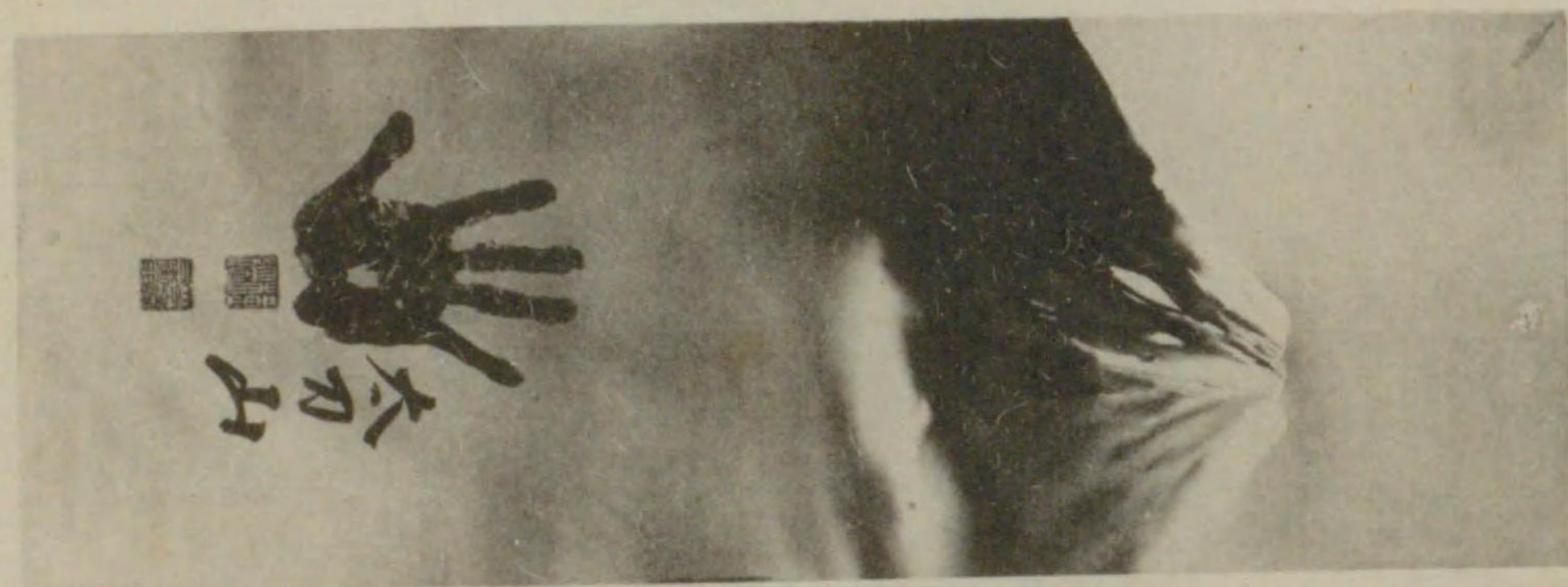
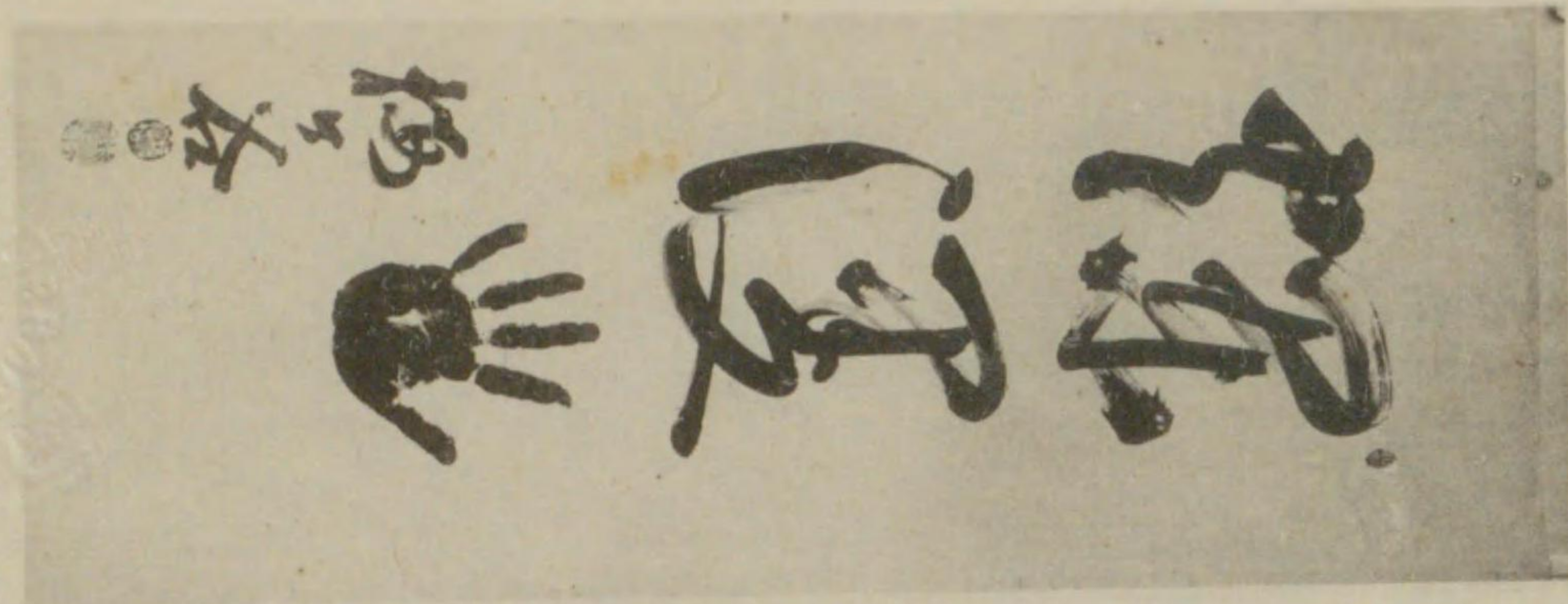
倉知誠夫氏



島正津司氏



佐藤達次郎氏



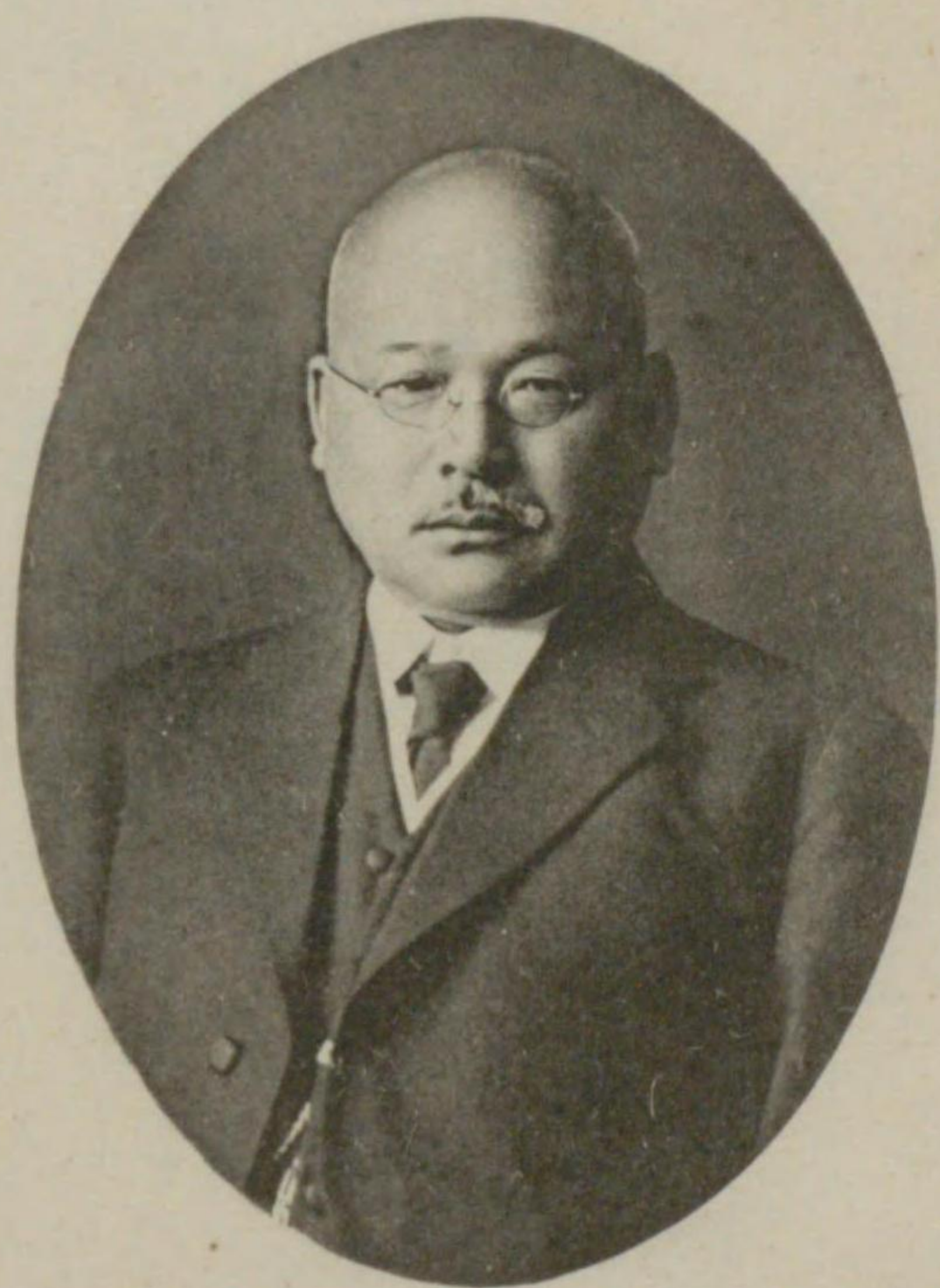
三横綱の躰





目次

第一	其生ひ立	一
第二	友綱の爛眼板垣伯の斡旋	三
第三	太刀山の東京	八
第四	友綱部屋に入門	九
第五	幕下時代	十
第六	常陸山と顔合	十四
第七	土俵上の成績	十六
第八	常勝將軍	二十一
第九	無敵の力量	二十三
第十	渠と鐵砲の因縁	二十六
第十一	京阪幕内十人掛り	三十
第十二	太刀山部屋の創立	三十二
第十三	譽れの太刀と金盃	三十三
第十四	渠の生活振	三十六
第十五	趣味及嗜好	三十七



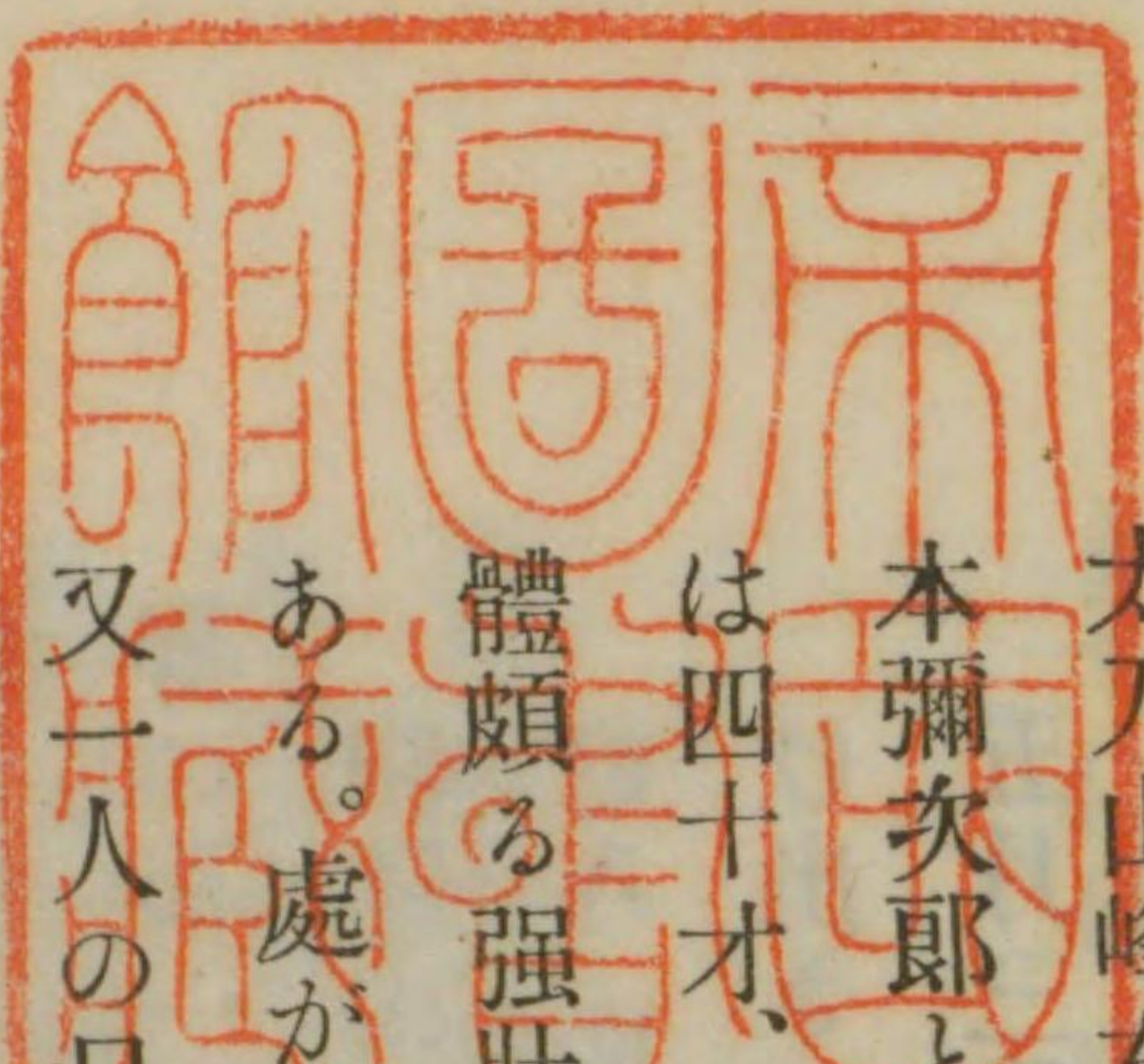
編者 龍野 龍一 氏郎



目次

第十六	家族及家庭	三十九
第十七	太刀山會及太刀山後援者	四十一
第十八	餘錄	四十八

### 第一 其生ひ立



明治大正の兩時代に跨り、天下無敵の常勝將軍と、内外から欽仰せられた、第二十代の横綱太刀山峰右衛門は、明治十年八月十五日越中國婦負郡西吳羽村字吉作よしつくりに生れた。本名は老本彌次郎と云ひ、父は治助と稱へ、夫婦の間に二男一女があつた。彌次郎は其の末子で、父は四十才、母は三十七才の時呱呱の聲を揚げたのである。父の治助は身の丈五尺三寸、身體頗る強壯、今年恰度八十歳の高齡に達したけれども、今尙鑠鑠として壯者を凌ぐものがある。處が母は彌次郎が三歳の時世を去つたので、それからは繼母の手に養育せられた。又一人の兄は彌次郎が十八歳の時に早世して了つた。家は代々農業に従ひ、傍ら製茶業を營んで、中流以上の資産があつた。彌次郎は教育としては唯だ普通教育を受けたばかりであるが、性質柔順、實父並に繼母に仕へて克く孝道を盡し、成長後は父母の命を守つて、専ら家業を勵んで居つた。けれども生れながらの體質骨格は、一際群童に勝れ、屢々四隣の人々を驚かした。恰度渠が十七歳の時、母親は茶受の代りにもと、一升七合の卸し餅を拵へた、すると健啖にかけても人後に落ちぬ彌次郎は、件の餅を唯だ一口に頬張つて終つたが、流石に苦しくなつたので、詮術無しに裏の柿の木に吊り下つて、腹の空くのを待つて居たと云ふ逸話がある。其翌年十八歳の時には、平氣で一石の米(目方四十貫)を擔ぎ、二



十歳の時は既に身の丈六尺に及び、体量は二十一貫に上つて、膂力亦飽くまで強く、米一石五斗(目方六十貫)を樂々擔ぎ廻つて郷黨に舌を捲かせた。徴兵検査を受けた時は、身の丈六尺八分に達し、砲兵に合格したが、抽籤により兵役を免かれた。然るに徴兵検査の際渠の體質骨格の偉大なことが、端なくも検査官首め、多數の人々に認められたので、忽にして遠近の大評判となつてしまつた。

當時角力界には、小錦、朝汐、大砲、梅の谷、荒岩等の名力士が少なくなかつたが、今の取締役出羽の海も常陸山として最も偉大なる將來を有し、未だ入幕もせぬうちより、近く角界の第一人者たるに至るであらうとは、好角家の齊しく認めて居た處である。

常陸山は舊水戸藩士、劔道家、市毛高哉の二男、明治七年一月の生れて、幼少から角技を好み、明治二十三年年齢十七歳の時、先代常陸山の門に入り、二十四年一月前角力に附け出され、次で序の口十六枚に進み、二十七年一月序の二段尻より、七枚目に進み、全年五月三段目に進んだが、一度東京を脱して名古屋、大阪の相撲の群に投じ、三十年秋再び東京に歸參し、三十一年一月、東方幕下大頭に現はれ、全年五月幕下十兩筆頭に進み、三十二年一月入幕し、次で關脇に進み、三十四年大關となり、三十七年一月梅ヶ谷と共に同時に横綱を張り、大正三年五月を以て力士を隱退した。

即ち常陸山は其筋骨勇健、四肢平均に發達し、膂力体量亦之に伴ひ、武士的意氣強く、入幕

以前より前途に多大の望を囑せられ、入幕後は、東西力士を通じて將來彼を制すべき力士の極めて稀れなるべきを想はしめた。然るに夫れから數年を出でずして、世にも稀なる強敵手が現はれた、それは外でもない太刀山である。そして太刀山が角界に現はるゝに至るまでには、實に面白い徑路があるのである。

## 第二 友綱の爛眼、板垣伯の斡旋

明治維新の元勳にして、立憲政体の樹立、四民平等の大義、自由民權の主唱者たる、伯爵板垣退助翁は、又角力道の大恩人である。相撲は實に我が武士道的國技として、精神的にも、將又體育的にも、國民必須の力技である。然ればにや老伯は生平角界の盛衰は延ひて國民元氣の消長に至大の關係ありとの主張を持せられ、常に斯道の隆盛を念として、力士の養成に努め、其の品位の向上を圖り、不斷の稽古を激勵すると共に、一方國技館の建設に奔走し、畏くも今上天皇陛下未だ東宮に在はせし時、特に行啓を仰ぎ奉る等、直接間接に力を添へられた事は幾んど枚擧に遑も無い程である。老伯嘗て余に向つて『自分は角力道の隆盛の爲には、東西の別なく一視同仁に盡して遣る考へであるが、最負は一方に定めて置かねば興味が少ない』と語られた事があるが、取締役友綱が前々の海山と稱し、土佐の出身にして伯が長く恩顧を垂れられた關係から、其位置の東西何れに在るに拘はらず



終始一貫、友綱部屋の屬する一方を愛せられ、伯の物色された力士候補者も、皆其門に入らしむるを常とせられた。又伯は角力四十八手の妙用を悟入せられ、特に力士たらんとする者の前途を鑑識せらるゝ眼光の透徹せる事は、専門の角力年寄等も尙ほ且つ企て及ばずと稱する所である。之は決して彼等が伯に對する諛辭ではない、既往幾多の實例は之を證して餘りある。

地方に在る友人にして、余に伯を慰藉する方法を問ふた者がある。其際余は『伯は以前劍術も柔道も棒も究め盡され、殊に馬術に熟達されて其の良否の鑑定を樂みとされたこともあつたが、今は之も廢められて、昨今は未來の横綱、大關たるべき力士の物色を唯一の趣味とも娛樂ともして居られるから、伯を慰めやうとするには、各地方に於ける力士希望の青年で、体格力量共に十分有望なる者を見出して、之を薦むるが第一の名案である』と答へた事があつた。

伯は明治三十一年の交、常陸山が未だ入幕もしなかつた當時から、夙く其將來に着目し、數年を出でずして必ず大關又は横綱たるべき者は彼であると豫斷し、當時西方に於ける大砲、荒岩、梅の谷以外に、常陸山に匹敵すべき、寧ろ常陸山以上に偉大なる力士を養成して専ら彼に對峙せしめ、角界に一大偉觀を添へて、斯道の興隆を圖らうとされたが、其熱心は最も高潮に達し、友綱始め一方の年寄連にも頻りに之を謀つて居られた。

明治三十一年五月場所打上げ後、大角力協會東西の力士は數組に分かれて、何れも地方へ巡業した。其うち荒岩、梅の谷、海山等の一行は、年寄友綱等之を率ひて北陸地方を巡り、其の年の秋も漸く闌けた頃、友綱は富山市で興行した。此時、不圖昨年徴兵検査以來評判の喧しい老本彌次郎の話を聞込み、其骨格なり身長なり休量なり之を力士に養成せば、天晴れ未來の横綱大關たるべき資質の具備せる事を思ひ、行司木村庄之助をして渠が家を訪はしめ、辭を盡して彌次郎に友綱の門弟となり、力士として出世を圖るべく懇諭した。處が父の治助は唯だ一人の男兒として、老本家の相續人たるものであるから絶対に力士とする事を好まない、のみならず彌次郎も亦元來極めて内氣の質であるだけに『自分は先祖以來の家業を繼いで、親達に孝養を盡したいから……』と飽迄首を振つて居るので、庄之助も今は説くに術なく、諭すに辭無く悄悄として立歸り、其次第を友綱に報告した。友綱はそれと聞いて非常に落膽し、恰も掌中の玉を失つた如く巡業中は彌次郎の事をのみ言ひ暮して居つたが、何か心に期する所あるものゝ如く、巡業を終つて歸京したのは其歳の暮であつたが、友綱は直ぐに板垣伯を訪ひ、越中で見た彌次郎の体格、力量及其失望した顛末まで仔細に物語つたのである。伯は友綱の話を聞き敢へず、方策既に案ぜられたものゝ如く『よろしい、余に考へがある。萬事余に一任せい』と云はれたので、友綱は喜び勇んで辭し去つた。



則ち伯は友綱の話を聞かると共に、彌次郎が徒に父祖の業を繼いで、無名の一農民に終るよりも、天下の大力士として世に立つことが渠の天分である。そしてそれが渠の爲にも幸福であり、又角界振興の爲にも、洵に喜ぶべきことである、如何なる術策を用ひても、必ず渠を力士たらしめやうと、早速に一策を案出せられたのである。

當時政界は、憲政黨内閣瓦解の後を承けた山縣内閣の時代であつた、故西郷從道侯が内相として對議會策に任じ、一方板垣伯は自由黨の總理、故星亨氏は副總理としての立場にあつた。そして山縣内閣は政機の運用を圓滑ならしむる爲め自由黨と提携して、第十三議會に於て國防方針を確立し、軍備擴張の財源たるべき地租増徴案を通過せしめたのであるが、此の時代が伯の政治的勢力の最も隆んな時であつて、若し自由黨が政府と提携を斷たん乎、政府は恰も水に離れた魚の如きものであつた。余は微力先輩の指導の下に、議會政略實行と黨勢擴張の任務とを擔ひ、常に伯并に故星氏に接近して、時々政府當局者との間を奔走して居たから、當時の真相は今尙記憶に新たなるものがある。

偕ても板垣伯は、此の問題に就いて如何なる妙策を運らされたか。明治三十二年一月中旬の事、伯は電話を以て西郷内相の在邸を確め『國家の大事に付至急面會したい』と申込むと、西郷侯から直ちに『他の來訪者には面會を謝絶して御來車を御待ち申す』といふ答があつた。そこで板垣伯は直ちに腕車を驅つて内相官邸に抵り、愈々膝詰談判となつたが、

面白いのは伯と侯との性格の相違である、伯は如何に笑ふやうなことがあつても、笑ふまゝいとすれば極めて眞面目で、決して微笑だも洩らされない。處が侯は之に反し、大の笑ひ好きで、左迄笑ふ程の事でなくとも呵々として大笑する。交渉談判等の用件で訪問しても、先づ應接室に於て來訪者にブランデーや其他の酒を勧め、頻りに笑ひ崩れて對手を笑殺し、幾んど要領を得せしめなかつた。

斯くて伯は侯の應接室に入るや否や、開口一番先づ『今日は國家の大事に付き、閣下の徳望と勢力とを以て、御援助を請いたい件があつて、參つたので即ち提携條件が一つ増した譯である。閣下が之を御承引になれば雙方の幸ひであるが、若し御承諾がない時は、己むを得ない、政府と我黨との提携を絶たねばなりません』と極めて謹嚴なる態度の下に莊重の言辭を以て言ひ出でられた。侯は如何なる大事件が湧き出したかと、例になく痛神の色が面に現はれたが、伯に向ひ『それは如何様な事柄で御座るか、自身にとり出來得る事なれば、何事でも必ず御助勢致さう』ときつぱり答へられた。そこで伯は『固より閣下の御援助を得れば必ず成功すべき事柄であります』と冒頭して老本彌次郎の事を述べ、『閣下より警部長位の人に御命じ下さつて、其人が口を出して呉れさいすれば、容易に取り運ぶ事であると思ふ、是非同人が力士界に這入る様御配慮に預りたい』と懇囑に及ばれた。伯の言葉を聞き了つて、侯は始めて大に安心したやうであつたが、『之は容易ならぬ



大事、御心配は御尤もで御座る。併し不肖引き受け、必ず閣下の御希望に副ふやう微力を盡しませうから、何うか御安心を願ひたい』と辭色嚴かに誓約された。伯も些か安堵の面もちで、吳々も其盡力を請ふて辭去されたが、此一會談、伯は好角家としての澹泊なる至情を遺憾なく流露し、侯は又、伯が好角の熱情を汲み、如何にもして伯を満足させやうと其の誠心を披瀝して盡力されたのである。

先年優勝旗祝賀會の折、伯が當時の有様の概要を演説されたが、席に在つた薩州の或老軍人が『戯談を笑はず言ふて、しかも笑ひ好きの故西郷侯に即座に責任を負はしめた伯の策戦は洵に巧妙と謂ふべきぢや』と評したことがある。

### 第三 太刀山の上京

侯、伯の談判は斯くして成立した、そこで西郷侯は直ちに秘書官に命じ、時の富山縣知事阿部浩氏に向ひ親展の長電を發した。

阿部氏は何事にも親切に世話好きの人、特に大政黨の首領たる板垣伯の懇囑に依り、西郷内相が責任を以て引受けられたとのことであつたから、今は慥か丸龜市の市長をして居る、藤好警部長等に托し、郡長、警察署長等へも内囑して、先づ父治助を説得し、漸く承諾せしめたが、彌次郎はなかく承諾しなかつたので、兎も角東京見物に赴き板垣伯に面會

するやう説き諭し、澁々ながら納得せしめ、愈々彌次郎上京と決したが、事は仲々仰山であつた。西郷、板垣兩元勳の依頼に依り上京せしむる彌次郎の事でもあり、且つ平素極めて内氣の性質である上に、長途の旅行、萬一身体に異狀があつては兩元勳に相濟まぬといふので、婦負郡書記(郡長代理)勝見貞靖、婦負病院長香月信太郎、村總代藤坂善平の三氏が附添ひ愈々其旅程に上つたが、心中飽く迄力士たるを欲せぬ彌次郎は、途中も快々として樂まず、着京したのは明治三十二年二月七日、伯が侯に依頼した日から起算して恰度二十三日目であつて、渠が二十三歳の春である。

### 第四 友綱部屋に入門

自由黨が山縣内閣と提携して、軍備擴張案を決定し、之が財源として數年來の難問題であつた地租増徴諸案を通過し、黨勢擴張の爲め、多少政府より便宜を與へられた事があつたとするも、若し政府から報酬を得たとすれば、伯が西郷内相の權勢を利用して老本彌次郎を越中の一農家から引出して天下の大力士たらしめた事の如きは、即ち其著名なるものであらう乎。

彌次郎が着京したと聞くと、伯は西郷侯と共に、直ちに築地の同氣俱樂部に於て引見した處、眞に友綱の直話以上に、天晴れ未來の横綱たるべき者と鑑識せられたので、伯の喜悅は



一方ならず、西郷侯へも厚く謝辭を陳べ、改めて渠に向ひ、今後十分稽古を勵み、努力奮闘して天下の大力士たるやう懇諭せられたが、渠は、侯伯に對してすらも、尙ほ力士たる事を誓はなかつた。併し兎に角友綱部屋に入れて友綱が徐ろに勸め諭す事に決し、渠は乃ち年寄友綱の門弟として全部屋に入門せしめた、夫れは二月十日の事であつた。

力士名は何と號けやうかと、種々講究された結果、越中立山を土地の人々が『たちやま』と訛つて呼ぶ處から『立山』と書いて『たち山』と號けやうとの議もあつたが、板垣伯は『立山』の字を用ゐて鼻負の人々が『たてやま』と聲援するやうな事があつては、遺憾千萬である『たて山』よりは『たち山』と呼ぶ方が語調に勢威があり、殊に太刀は武士の魂で、角力は武士道の國技であるから、寧ろ文字も『太刀山』と命ずるが宜しいと、一斷即決、則ち太刀山峰右衛門と命ぜらるゝに至つた。

## 第五 幕下時代

友綱は木村庄之助と共に心血を傾けて得やうとした太刀山が、首尾よく伯と侯との力に依つて門弟とすることが出来たので、一度失つた明玉が再び我手に入つたやうに、其の喜びは察するに餘りあるものがあつた。けれども既に二十三歳となつた中年力士であるから、飽く迄稽古を勵まし、五六年を出でずして、天下無敵の大力士として出現せしめやう

との意氣組であつたが、太刀山は一向に氣乗りした稽古振りも見せなかつた。けれども其の練習時代に在つてすら、渠は渠の天分に伴ふ特別の境涯に置かれたのである。由來角力道に於ては、一日たりとも自己より早く入門したものを兄弟子と敬い、又十兩以上を關取と稱し、其の階級規律は頗る嚴肅なものである。然るに太刀山は体格力量忽ち大關横綱たるべき資質がある上、板垣伯の關係もあり、又友綱も非常に愛して居つたので、普通取等が關取や兄弟子に虐使されるやうな酸苦を嘗めず、忽ち關取格になつた。渠は實に此點から見ても幸運兒と謂ふべきである。そして渠は澁々ながらも稽古の際人の取組みやうを見て上突張りとして吊り丈けは自分にも出来るだらうと色々な工夫を重ねた、之が他日渠を偉大ならしめた一因である。其年の一月場所も既に濟んだので、友綱は初めて太刀山を伴ひ地方巡業の途に上つた。一行が阿波の徳島で興業中の事であつた、土地の素人力士の大關で、東京相撲とすれば十兩格位であつた、九紋龍と云ふ力士と太刀山とを取り組ませた、之が太刀山が土俵に登つた皮切りである。處が此勝負三番の中二番迄上突張りて太刀山の勝利となつた。それが爲め九紋龍は立腹して『あんな小坊主と取組ませるなら、明日から出場しない』と組合へ抗議を申込んだ事がある。之れ以來太刀山は始めて相撲の興味を覺え、爾來宛ら甦つた様に稽古も勵み、其翌日からは東京力士の幕下二段目と毎日顔を合せ、取組めば必ず勝ち、巡業中一度も敗を取らなかつた。けれども運命は渠にのみ幸



ひするものではなかつた。同年の五月の本場所には、稽古の爲め上膊肩胛部に負傷して休場し。翌三十三年一月場所には流行性感冒と脚氣の氣味で發熱した爲め休場の止むなきに至つた。即ち渠は負傷と病氣の爲め本場所二回丈け土俵に登ることが出来なかつたのである。處が同年五月場所には頗る元氣で、始めて本場所土俵上の人となり、幕下に附け出され、四日間取組んで全勝した。之れに依り渠は更に深く相撲の興味を悟り、最も急速の發達昇進を遂げたのである。尙渠が初め稽古を嫌つた時、師匠友綱も痛く之を氣悶つて居たが、友綱の妻女千代は、力士の妻女中屈指の才女と稱せられて居るだけに、夫友綱と謀つて門弟中の三四を招き、密に命じて太刀山に稽古を附ける際は、時々渠に勝を譲つて速に稽古の趣味を感ぜしめ、喜んで稽古を勵むやうに圖つたとの説もあつたが、友綱の妻女としては此位の事はありさうな事である。太刀山は斯うして養成されて來たのであるが、初め太刀山は伯に向ひ『支度部屋で大男が寢て居るのを見ますと、今に彼等と角力を取らねばならぬと思ふと實に恐ろしくなります』と言つたことがある。其時伯は渠に『愚かなことを云ふな、今に彼等が皆お前を恐ろしがるやうになるぞ』と云ふて且つ慰め且つ勵まされた事實もある。其中、太刀山も自ら角力の眞味を覺り、又板垣伯の激勵と師匠夫妻の慈恩に感奮し、立派な關取となつて、伯と師匠の恩誼に酬ひやうと決心して、一層稽古を勵んだから、全く加速的に發達して、初め友綱の妻女の注意に依り故ら敗けた力

士連も、今は如何に眞劍に相撲ふても、迎も渠に勝つことが出来ないやうになつた。其時分伯が太刀山に向つて『角力をやめてはどうぢや』と戯れらるゝと、渠は顔を赭らめながら『閣下其事丈は何卒人中でお言ひなさらぬやう願ひます』と答へた事があつた、無邪氣愛すべきではないか。當時友綱部屋には國見山(今の年寄放駒)海山(今の年寄二所ヶ關)等の名力士があり、殊に海山の如きは、土俵の上よりは稽古が巧みで、其上膂力も亦強かつた。併し此の力士は、決して喜怒色に顯はさず、曾て本場所で常陸山を二回破つたことがあつたが、其時も餘り喜びもせず、又自分とは比較にならぬやうな力士に負けても、さのみ口惜しがりもせぬ平氣な力士であり、國見山は人格も頗る善く、親孝行の人で、後に永く大關の地位に在つて、自己より下のものをこなすに妙を得た名力士である。其の國見山や海山等が主として太刀山に稽古を附けて居つたが、太刀山の急速の進境と共に、最早彼等には迎も十分の稽古を付けさせることが出来なくなつてしまつた。

此に於て友綱は、當時東西を通じて最も強く、且つ全盛を極めて居つた常陸山を訪ひ『自分の門弟太刀山は一日も早く其の地位を進ませて、關取と顔を合させ、是非關取を負かせやうと望んで居る候補者であるが、自分方の關取丈けでは思ふやうの稽古を附けることが出来ないから、何うか此處一番關取が引受けて充分の稽古をつけて貰ひたい』と懇囑した。流石は常陸山、即座に之を快諾して、爾來最も意を用ゐ、宛ら自分の愛弟子でも



あろうやうに稽古を附けて遣つたので、太刀山の進歩は一層速かなるものがあつた。將來自己を敗るべき敵手と知りながら、友綱の懇囑を快諾して、熱心に稽古を授けた常陸山の襟度と、其の男らしき意氣とは、眞に讚美すべきもので、常陸山と友綱との對談の光景も今尙眼前に彷彿たるものがある。

## 第六 常陸山と顔合

斯くて太刀山が三役に入つて以來、正横綱常陸山と始めて顔の合つたのは明治三十八年の五月場所で、太刀山は關脇であつた。兩者の勝負は引分けに了つたが、翌三十九年一月場所に於ては、太刀山が敗を取つた。併し其場所に於て、太刀山は僅に駒ヶ嶽、常陸山に敗れたのみで、他は皆勝星を占め、常陸山は九日間全勝を制した。全年五月場所は太刀山は六日目より腸胃病の爲め止むなく休場して常陸山との顔合はせがなく、四十年一月場所は、常陸山は病氣の爲め全休し、四十年五月場所に於て、關脇太刀山は六日目に正横綱常陸山と三度目の顔が合ひ、美事に勝を制したが、當時太刀山の体量は二十四貫、時々痼疾の腸胃病に苦んで居つたのである。其後は常陸山と顔が合へば必ず勝つか然らずんば分となつて、常陸山隱退迄一回も敗けたことはなかつたのである。始めて常陸山に勝つた時、太刀山は欣然として余等に語つて曰ふ『數年心掛けて居りましたが、漸く常陸山關へ恩を

返しました』と、由來角力道に於ては自己に稽古を授けて呉れた師匠を、晴れの土俵上に於て一度負かせば、即ち之が恩返しであつて、其後は師弟同格となる常習である。太刀山の言葉は即ち此の意味を言ふたので、兎も角常習上、形式上の報恩は濟んだのであるが、併し精神上實質上の報恩は未だ濟まない。其の後に至り、太刀山が大關、横綱となつた前後余等に對して『私が今日の地位になりましたのは、第一板垣、西郷兩元勳の御蔭と、師匠友綱の薰陶と、第二に稽古を授けて貰つた常陸山關の御蔭であります』と語つた事は實に一再に止まらなかつた。

太刀山が出羽の海部屋の力士と合同して、地方巡業の時は、渠は常陸山の愛弟子で、今日の名力士となつて居る大錦、栃木山、對島洋、九州山、兩國、宇都宮等に對し熱心に稽古を授けてやつたものである。殊に栃木山の堅實なる取口には甚く感じて居たやうであつたが、果然國技館の本場所に於て、第一に栃木山に恩を返され、大錦は其の第二次であつた。出羽の海門下の有望力士中『何人が第一に太刀山を破るべきか』は久しい間の問題で、好角家中には巨額の懸賞をして之を激勵して居る者もあつた。太刀山は此の真相を知りつゝ、彼等の爲めに稽古を授け、以て自己を倒すべき勇者の出でんが爲めに努めたのは、是れ實質上、精神上、常陸山に對する報恩の意志であつたのである。其の襟懷洵に愛すべく、其の心事眞に喜ぶ可きではないか。常陸山が稽古を授けて、太刀山を大成せしめた襟度と、



太刀山が常陸山の愛弟子等に稽古を授けて彼の如き名力士を輩出せしめた報恩の義心とは、兩々相俟つて天下の雙美とも謂ふべく、這般の武士道的意氣、男兒漢の面目は獨り此社會に於てのみ認むることが出来るのである。

試みに社會の各方面を見よ、政治界は情弊に次ぐに情弊を以てする有様で、彼等が相争ふや、陰險陋劣幾んど其の手段を擇ぶ所がない。又實業界に於ても武士的精神は日に月に滅び行きて、轉た商業道德の衰頹を嘆ぜしめる。殊に衆生濟度を本願とすべき宗教界に於てすら、權勢利祿の爲めには、忌むべく厭ふべき手段を弄する事實が尠くない。然るに獨り角力道に於ては、今日の取的も實力あれば忽ち明日の大關となる、總て實力を本位とし、優劣を基準として其地位を上下し、何等の情實も容されぬ。そして其の交りたる、眞に光風霽月の如く、情誼に厚き事又古武士のそれに等しきものがある。若し此社會に於ける意氣精神を政治、實業の各方面へ移して、以て革新的氣運を促進せば、國家、社會を益すること蓋し尠少ならざるものがある。

## 第七 土俵上の成績

左に渠の土俵上に於ける成績を年代的に表示しやう。

- (一) 明治三十二年二月、年齢二十三歳にして力士となり、全年五月、翌三十三年一月の

一二場所は負傷と病氣の爲め休場し、三十三年五月、二十四歳にして幕下に附出され、全場所に全勝してレコードを破る。

- (二) 三十四年一月、始めて番附に入り、十枚目下幕下頭より六枚目に列して優勝す。

- (三) 全年五月番附面三枚上りて十枚目下幕下頭より三枚目に列し、七日間登場四日間勝ち二日分け一日負けたり。

- (四) 三十五年一月、六枚進みて幕下十兩八枚目に列し、十日間登場六日勝ち一日分け三日敗る。

- (五) 全年五月、五枚昇進して幕下十兩三枚目に列し、十日間登場し特に幕内力士と八日間十兩力士と二日間取組みて全勝し、當時協會のレコード破りと稱せらる。

- (六) 三十六年一月、一躍入幕して前頭九枚目に現はれ、九日間登場六日勝ち三日負け、全年五月、八枚昇進して前頭二枚目に列し、九日間登場四日勝ち四日負け一日分けたり、是れ即ち太刀山が力士たりし以來最も不成績の場所たりしなり。

- (八) 三十七年一月、前地位に在り、九日間登場七日勝ち二日敗る。

- (九) 全年五月、前頭筆頭に進む、東方横綱大砲は張出され、横綱大關梅ヶ谷、關脇國見山、小結荒岩にして太刀山は其の次に位し、西方は横綱大關常陸山、關脇稻川、小結朝汐にして前頭筆頭は駒ヶ嶽たり。駒ヶ嶽と太刀山とは好角家より多大の望を囑せられ



相前後して並進せしが、此場所に於て兩者同地位となれり。九日間登場八日勝ち一日負け。

(十) 三十八年一月、前地位に在り、九日間登場七日勝ち一日預り一日敗る。

(十一) 全年五月、當時の西方頭部に名力士少なりしを以て、權衡上、東方小結荒岩を西方に廻して大關に進め、東方は横綱大砲は依然張出に在り、梅ヶ谷正横綱に、大關は國見山を進め、太刀山は小結を飛び抜いて關脇に進み、西方は常陸山を正横綱とし、大關荒岩、關脇駒ヶ嶽となし、太刀山と駒ヶ嶽とは此に復た同格となれり。此場所相手に休みあり、八日間登場し、五日勝ち一日分け二日負けたり。

(十二) 三十九年一月、(關脇)九日間登場七日勝ち二日負け。

(十三) 全年五月、(關脇)初日より五日迄登場残る四日は痼疾の爲め休み、五日間に四日勝ち一日敗る。

(十四) 四十年一月、(關脇)對手に休みありし爲め七日間登場五日勝ち一日負け一日負け。

(十五) 全年五月、(關脇)九日間登場八日勝ち一日敗る。

(十六) 四十一年一月、(關脇)九日間登場六日勝ち一日預り二日負けたり。

(十七) 全年五月、(關脇)九日間登場七日勝ち、一日分け一日負け。

(十八) 四十二年一月、(關脇)東西位置交換され、太刀山は入幕以來東方に在りしが、此場所

より西方となれり。八日間登場六日勝ち一日分け一日負けたり。

(十九) 全年五月、西方大關に昇進す、東方は正横綱常陸山、大關駒ヶ嶽、關脇錦洋改め西の海、小結朝嵐(今の朝汐)にして、西方は正横綱梅ヶ谷、國見山は張出大關となり、太刀山は正大關に進み、關脇玉椿、小結伊勢の濱となり、太刀山と並行し來りし駒ヶ嶽は渠より五所前四十年の一月大關に昇進せしも太刀は前四ヶ年八場所關脇の地位に在りき。是れ蓋し渠の上位には大砲、梅ヶ谷、荒岩、國見山等の名力士ありて、渠は其の進路を塞がれたるが爲めのみ。然も關脇たる渠が其の實力に於て、大關以上たりしことは、角通の齊しく認め居りし處とす。渠が大關の實力ありて責任輕き關脇に留まり、縦横無盡に活動せしは寧ろ愉快なるものありしならん。大砲、荒岩相次で隱退し、同門の兄弟子國見山張出しとなり、茲に始めて渠は名實共に正大關たるに至りしなり。此場所より國技館の建築竣工し、従來回向院内晴天十日の角力に於て、幕内力士の取組は九日間なりしも、此場所より全取組を十日間とし、又優勝旗の制を定め、東西幕内力士の總體を通じ成績優良なる方へ優勝旗を授與し、該旗所持の方、東位を占むること、せり。又時事新報社は斯道獎勵の爲め東西幕内力士中成績最も優秀なるものに銀製大洋盃を與へ、國技館内に其肖像を大額面として掲ぐること、なりぬ。

此場所渠は十日間登場八日勝ち二日敗れたり、此場所に於ては好角家が鈍州と異名



せし、軀幹は長大なりしも力技は寧ろ鈍重なりし高見山の成績優秀にして、流石の太刀山も高見山に敗れ、豎子をして名を成さしめ、國技館開館第一の大額面を掲げしむるに至りしは眞に意外の番狂はせなりき。

(三) 四十三年一月、(正大關)對手に休みあり、九日間登場六日勝ち一日預り二日分けたり。

(二) 全年五月、(正大關)十日間登場九日勝ち一日分け東西幕内力士中成績最優等を以て前記額面を掲げらる、之を第一回とす。

(三) 四十四年一月、(正大關)十日間登場八日勝ち一日預り一日分け前記理由にて第二回の額面を掲げらる。

(三) 全年五月、横綱を許され、梅ヶ谷は張出しとなりて、太刀山正横綱の榮位に座し、國見山正大關に復し、伊勢の濱關脇に、千歳川小結に、又東方は西の海張出大關に常陸山正横綱に、大關駒ヶ嶽、關脇相生、小結高見山にして、太刀山は此に始めて駒ヶ嶽を凌駕し、常陸山と相對して同地位に進みしなり。此場所十日間登場して全勝し、開館以來最優秀の成績を挙げ、第三回の額面を掲げらる。

(三) 四十五年一月、(正横綱)十日間登場八日勝ち一日分け一日敗れしも、成績最優秀にして第四回の額面を掲げらる。

(三) 四十五年五月、(正横綱)十日間登場再び十日間全勝して、第五回の額面を掲げらる。

(三) 大正二年一月、(正横綱)病氣のため全休。

(三) 全年五月、(正横綱)三度び十日間全勝、第六回の額面を掲げらる。

(三) 大正三年一月、(正横綱)四度び十日間全勝し、第七回の額面を掲げらる。

(三) 全年五月、(正横綱)相手に休みあり九日間登場八日勝ち一日預り。

(三) 大正四年一月、(正横綱)病氣の爲め全休。

(三) 全年五月、(正横綱)五度び十日間全勝、第八回の額面を掲げらる。

(三) 大正五年一月、(正横綱)病氣の爲め全休。

(三) 全年五月、(正横綱)十日間登場九日勝ち一日負け、最優秀の成績を以て第九回の額面を掲げらる。

(三) 大正六年一月、(正横綱)十日間登場九日勝ち一日敗る。

(三) 全年五月、(正横綱)病氣の爲め全休。

### 第八 常勝將軍

太刀山は二十三歳の中年を以て、斯界に入りながら、古今稀なる偉大の力士となつて、國技館上九枚の優勝額を掲げらるゝに至つたのは、眞に驚嘆に値ひする。余は渠が額面の尙



一二回、多く掲げらるべき機會のあつたのに拘はらず、餘りに太刀山の額面のみ多きを嫉んでの所爲か、將又他に深き理由があつたのか、俄に對手に休場せられた爲め、其機會を逸した事のあつたのを確かに記憶して居るが、此等の事實は却て太刀山の大を爲さしむる所以で、優勝額の一二枚の多少は敢て渠の勢威に關するものではなく、渠の鼎を輕重するに足らぬのである。而して渠が始めて土俵に登つて全勝し、十兩に在つて十日間全勝し、大關横綱になつて屢次全勝し、殊に斯界に入つてより未だ曾て一回も番附の下りたることなく、常に昇進一方のみで、常勝將軍と呼ばれた如きは、眞に異數と稱すべきである。國技館の成りし翌年、渠は密に余に語つて曰ふ『國技館も出來、又自分も幸に大關になつた以上は、國技館の土俵上若し一場所二回以上の敗を取つた時は、速に隱退して、大關又は横綱の權威を保ちたい』と、果せる哉、國技館開後は渠は一場所二回以上の敗を取つたことは無いのである。

太刀山が入幕以來今日に至るまで、十有五年間本場所に於て渠に破られた力士を數ふるは、徒らに其の煩に堪へない、寧ろ渠に勝つた力士の名を掲げて、其の名譽を後世に傳へんと思ふのである。

一回だけ勝ちしもの、

甲、逆鋒、有明、荒岩、大港、朝嵐、栃木山、大錦、

二回勝ちしもの、

稻川、碓瀉、高見山、西の海、

三回勝ちしもの、

駒ヶ嶽

四回勝ちしもの、

常陸山、兩國、(先代にして今の年寄入間川)

## 第九 無敵の力量

太刀山が入幕後關脇に昇進した前後は、往々立會ひの拙ない處があつた。又相手の計略に乗せられて不覺の敗を取つたこともあつた。渠の角力は敵に敗けるのではなく、自分が無理をして自分の手と自分の力とで負けることが多かつた。處が板垣伯は角力四十八手の使ひ分に精通し、又立會ひの呼吸を熟知せられて居つたので、伯は太刀山が強敵又は手取力士との取組の前には、伯得意の正奇の軍略、虚實の策戦を加味した妙手を研究して密に太刀山に授けられ、太刀山は伯の示教を參酌して勝利を得たことも少なくない。此の點に於て伯は或る場合には太刀山の策戦上の軍師の如き觀があつた。之が爲め伯の執事關口武二郎氏は傳令使の任に當り、場所中は伯と太刀山との間を幾度も往復し、太刀山の爲め



寄與した功亦没すべからざるものがある。

又渠は其入幕當時に在つては、自己が如何なる手で勝つたか知らない時が往々あつた、曾て幕内中軸の或力士と取組み、立會ひ鼻にいなされて狼狽したが、忽ち立ち直り敵をつかみ投げにして非常な勝ち方をしたことがある。そうして自分は之を知らず、後に伯や師匠に『先刻は何んな手で勝ちましたか』と聞いたことがあつた。渠が入幕前後、友綱が一方の支度部屋へ行くと、ゴロ／＼と各力士が寝て居つて『これは皆親方の處の鬼に喰はれた死骸だ』と戯れを云つたこともある位である。

太刀山が既に關脇に昇進し、將に大關にならうとする頃から立會ひの呼吸も會得し、又對手の如何によつて戦術を異にするなど土俵上の働き毫も危険けなく、横綱に進んだ後は、技、益々圓熟し、例へば出足の早き強力士に對しては、十分土俵を守つて同格に仕切り、躰軽く技巧妙の力士に對しては土俵を譲つて構ふるが如く、仕切の工合、立會の意氣、取り方の變化等、愈堅實を加へて眞に練達の妙境に入つたことを思はせる。

太刀山が最も得意の手は上突張り即ち鐵砲であるが、時々右に捲込んで左筈に押すことがある。渠の角力には比較的分け預りが少なひ。又渠は角力四十八手以外に新に數種の取り手を案出し、時々何人も解せざる手を用ゐたことがある。其の一二の例を擧ぐれば、四十八手の中『ゆりもどし』に類する手を用ゐ、或は左で敵の上手禪を取り右で筈に押飛ば

すが如き是れである。渠は之を『釋迦の佛壇返し』又は飛行機投げなご、戯れて云ふたことがあつた。

國見山が全盛にて大關たりし頃、太刀山と共に東海道を巡業し、岐阜に於て興業中、一日太刀山と國見山と申合を始めて居つた。其折同行して居た友綱、尾車、花籠(元の名力士荒岩)の三年寄が、之れこそ見物である、後日の參考の爲めに見て置かうと、片唾を呑んで見物した。兩力士の立上るや、流石は國見山である、太刀山の猛烈なる鐵砲を避けて組まんとするを、太刀山は左で手を宛てゆりもどしに國見山を投げたが、國見山の三十六貫の躰は宙を飛んで地響を打たせた。三人の年寄も此態に唯だ茫然と舌を捲き、互に顔を見合はせて驚嘆した。歸京後三年寄は伯に此事を語つて更に曰く『常陸山全勝時代には大砲、梅ヶ谷、荒岩、海山等の好敵手があつて、渠が全幅の力量、技倆を試めず事も出来たが、太刀山には好敵手乏しく、渠に全力を注がしむる事の出来ないのは眞に遺憾であります。従つて渠の力量の程は容易に測り知ることが出来ません』と。

又國見山も余等に『ゆりもどしと云ふ手は、横綱や大關が二段目以下の段違ひの力士に使へば立派に極まる手であるが、幕内力士や自分と稍同格の力士に使つて利く手ではない、然るに太刀山は敵手を擇はず、相手が幕内でも大關でも構はず之を使つて美事に勝つ、其雄偉の力は實に驚くべきものである』と口を極めて激賞して居つたことがある。



一昨年の冬太刀山組は巡業して土佐の高知市に抵り、出羽の海の率ある大錦組と落合つて合併興行をした際、太刀山は右足の疾患重り、疼痛もあつて梯子段の昇降も困難のため、宿屋にても便所に近い下座敷に陣取つて、角力場への往復も苦しかつたが推して登場して居た。此時出羽の海門下の精銳大錦、栃木山、九州山、對馬洋、兩國等の各名力士は、縱令一回でも渠を負かすは此時であるとばかりに、何れも本場所に劣らぬ勇氣を以て奮戦激闘したのであるが、太刀山は一回だも禪をも取らしめず、連日之を撃退して了つた。渠が得意の上突張り即ち鐵砲の猛烈なのは、眞に鬼神の如く、何人も容易に之を受け止むることは出来ないのである。併し最近にては鐵砲を亂射せずして敵を制する術を専念研究して居るやうに察せらるゝ。渠の力技の進境によるか、將た他に理由の存するのである乎。

## 第十 渠と鐵砲の因縁

太刀山と鐵砲とは如何なる因縁があつたか、渠が生れたのは恰も西南戦争の砲聲轟々たる時で、徵兵検査には砲兵に合格したが抽籤で免かれ、又西郷侯、板垣伯は國防方針に關して議一致し軍備擴張地租増徴を斷行して、軍備の充實を謀り、之が爲め日露戦役に於て我國は世界無比の大勝を博するに至つたのである。蓋し兩元勳が國家の爲め軍備の充實

を計つた其愛國的精神が、太刀山の筋骨精神に感應して、以て渠の鐵砲に偉大の威力を與へたのであるまい乎。渠は砲兵として兵役に服さなかつた代りに、内外各地の土俵に於て大小鐵砲の使ひ分けに據り幾多の強敵手を制して了つた。渠は一砲兵として十把一束的に邦家の爲め働くよりも、天下の大力士として國民の體育に資し、國民の元氣を振興せしめた功績は遙かに偉大と謂つべきである。

板垣伯は常に太刀山に嚴訓し『苟も力士たるものが晴れの土俵に於て、妥協即ち八百長角力を取るが如きは、角力道の本義に反し、武士的精神の全滅を意味する。若し太刀山が如何なる事情あるに拘はらず妥協角力を取つた形跡があれば、余は斷然絶交して余が門に入るを許さない』と、伯の此の訓戒は凜乎として常に太刀山の腦裏に刻印せられつゝあつた。然るに太刀山が大正五年五月場所に於て八日目に栃木山に敗れ、大正六年一月場所に於て十日目に大錦に敗られた其際、此二勝負に就て、妥協ではないかと評する者が有つたが、余は全然之を信じない。當時太刀山の境遇上、妥協的に故らに負を取つて自己の名聲を墜すべき必要があつたであらうか、又一方栃木山、大錦は共に出羽の海門下の名力士として、日頃出羽の海より、峻嚴なる武士的薰陶と稽古を受けつゝある前途春海の如き有望力士ではない乎、妥協と云ふが如き忌はしき疑ひを抱く批評家は、兩者の人格、裡面の眞相、角力の意氣、一番勝負は時の運であることを知らない味者であるばかりでなく、兩



者を侮辱するの甚だしきものである。余は斷じて之を排斥する。

前數場所に於て常に太刀山が全勝のみを續けたのを見た人々が、特に不思議の感を起すは素より有り得べき事とするも、一番勝負に於ては、往々太刀山に勝ち得るだけの力と技との發達した栃木山、大錦の進境を賞すべきである。然しながら大正五年の五月場所前、太刀山は稽古の爲めに左手に負傷し、繙帶の儘熱氣ある身をも厭はず登場して左手の働き充分でなかつた爲め、或る好角家をして『片手角力の横綱』と評せしめた事實さへある。又大正六年一月場所には、右足は神経痛及脚氣の氣味で水氣を有ち、二三の友人から切に休場せよと勧められたにも拘はらず、渠は之を斥け、平然として登場して居つた、之も疑ひの無い事實である。けれども渠は栃木山、大錦に敗れた時も、手足の疾患の事は毫も口に出さず、唯だ兩力士の進境を賞讃して居つたばかりである。勝負は時の運、勝つも負くも共に堂々として男兒的骨頭を失はざらんことを要する。力士の意氣精神は眞に此に存するのである。如何に鬼神の如き太刀山と雖も、自己の病氣は其鋭き鐵砲を以つてするも竟に之を撃退することは出来ない。友綱へ入門した當時は脚氣に苦み、其後は胃腸に痼疾あつて、常に之に悩み、爲めに往々體量も減じ、顔色も蒼白となり、屢々其活動を妨げられたことがある。數年間胃腸病とのみ思つて居つたものが、十二支腸蟲と判明し、之を驅除して後は胃腸は頗る健全になつた。普通の人が十二支腸蟲に悩まされたら頗る衰弱す

るものであるのに、數年間平氣で角力を取つて居つたのも異數である。胃腸の疾患は癒えたか、更にまた右足に激しき神経痛と脚氣の氣味があり、時々水腫を有つて十分の稽古も出来ぬことが多い。渠が多年恩顧の國手佐藤博士首め幾多の名醫の診断も略同一で、角力を廢めねば根治の望みがないと謂はれた。是れ即ち渠が大正七年を以て力士界を隱退せんと決心し、又渠の恩師友綱、恩人板垣伯を首め太刀山後援會幹部諸氏が齊しく其の隱退に協賛した原因である。渠にして此疾患なかりせば、今後數年間横綱の權威貫祿を維持する敢て難くはないのである。

回顧すれば渠の斯界に入つてから實に十有九年、其間今日に至る迄本場所に於て、病氣の時は初日より登場せず、唯だ明治二十九年五月(關協時代)初日より五日迄取り、六日目より四日間痼疾の發した爲め休場した事があるばかりで、而も這は渠が敗れた爲めでなく、五日間に四日勝ち一日負けただけである。初日登場すれば相手が休場せぬ限りは必ず最終日迄登場し、其間多少の疾患があつても推して登場するを常とした。而して入幕以來全休したのは、大正二年一月、大正四年一月、大正五年一月、大正六年五月、の四場所のみであつた。天下の大力士にして初日以来二日か三日取組み、勝負付に黒點(通稱炭團と云ふ)のみを戴くか、又は翌日の取組が自己の苦手力士なる時は俄に病氣と稱して休場するもの、少なくない上に、横綱、大關、關協等の榮位に座する者にして尙往々此事あるを認む



る。果して眞の病氣ならば同情に値すべきも、今日は知らず、以前は協會へ唯一片の病氣届を投げ込めるまゝ、自分は青樓に登つて鯨飲放歌して居つた者すらあつたと聞く。それが若し事實であるならば自己の責任、天職を忘れ、武士道の精神を没却して、天下萬衆を欺く唾棄すべき行爲と謂はねばならない。

協會は星勘定や又自己の地位固持の爲め、萬一假病を使ふ卑怯の力士があつた場合には之が制裁を峻嚴にし、以て益々武士道的精神を鼓吹し、斯道の隆盛を期せなければならぬ。之を望むは敢て協會の爲めのみではない、一般士氣の振興に關する事、大なるものが爲めである。余は此點に於て大正六年一月場所に於ける玉手山の意氣を壯とする、渠は九日目迄連敗し炭團九個の不名譽を忍びつゝ、尙悠々として登場し、十日目に九州山を屠つて此一點の爲め東方は漸く優勝旗を得るに到つた。太刀山が全場所に於て東方代表者として、優勝旗を受領したのは即ち此玉手山の一星の爲めであつたのである。

### 第十一 京阪幕内十人掛り

太刀山は東西合併角力に於て、屢々優勝し、又布哇に渡航して、其雄偉なる躰軀と、剛強無比の膂力とを海外觀衆の前に示し、又滿韓地方を巡業して、同地方の民衆に其豪強を欽仰せしめたが、特に此に記すべきは、大正三年肥後熊本に於て相撲常設館の開館式に、東京

大阪兩協會力士合併興行をした時の事である。其の八日目に熊本司家の所望と東京、大阪兩協會の推奨とに依り、太刀山をして幕内力士十人拔を爲さしめた、兩協會より撰拔されたのは、

東京方、大蛇湯(今の錦島)、金の花(今の戸平)、小野ヶ崎、御舟湯

大阪方、放駒、千舟川、秀の海、加古川、小染川、男山

以上の十力士であつたが、此勝負に對しては、巨額の懸賞をなし、誰でも太刀山を倒した者には、賞金を與へる事とし、相互に懸命に角力はせた。けれども太刀山は十人が十人、一人にも自分の禪へ手を掛けしめず、渠一流の鐵腕を以て、美事十人を薙ぎ倒し、觀衆をして驚嘆せしめた。古來横綱に對し、幕内五人掛の例はあると聞いたが、十人拔は眞に破天荒の壯舉であつたのである。以て渠が實力の如何を知るに足りやう。

太刀山の体格は上京當時身の丈六尺一寸であつたが、現在の身長は六尺二寸、体量は時に大に増減があつたが現在三十七貫五百目内外あり、骨太く筋肉締り、四肢何れも平均に發達して居る。又其角界に入つてから今日に至る迄の體格發達の模様、風采の變化等は本書掲ぐる所の寫眞が之を説明して餘りある。又力士としての給金は百七十三圓二十五錢で、協會創立以來第一の高給者である。



## 第十二 太刀山部屋の創立

太刀山は大正元年師匠友綱の許諾を得て、地を現在の東京市本所區小泉町二十七番地にトし、宏壯なる住宅及稽古場を新築し、新に太刀山部屋を創立した。門弟は實に四十有五名の多きに達して居る。併し部屋の創立日尙淺きが爲めに門弟中未だ入幕力士を出すに至らぬけれども、漸次有望力士を出すに至るは疑ひない。今日に於て門弟中好角家の囑目せる力士を示せば左の如し。

十兩

太刀嵐

幕下

太刀光、和合の浦、火打洋、太刀の海、甲斐山、太刀湊

三段目

鞍ヶ嶽、若太刀、太刀ヶ峯

若者頭は太刀の音で、太刀山組合理事は猪谷松次郎氏である。太刀山部屋直屬の門弟は右に記す通りであるが、現在友綱門下の各力士は多く太刀山の稽古に頼つて發展を示し、又西方の重鎮鳳、伊勢ヶ濱、黒瀨川、錦島等を始め、渠を稽古臺として技を磨き力を養ひ、以て其の進境を速かならしめたのは事實であつて、渠は其大關に昇進以來は眞に西方總帥たるの責務を盡しつゝ、今日に至つたのである。

太刀山隱退後は、横綱鳳渠に代つて總帥の地位たるべき順序である。鳳は貫祿、實力、人格共に毫も不足なしと雖も、若し余の老婆心を述べしむれば、太刀山は隱退と共に國技館裡の土俵上よりは全く退く事とするも、其斷髮式は之を數年の後に延期し、痼疾の疾患甚しからざる限り、鳳の補佐として西方力士に稽古を授け、以て速に多くの有望力士を養成し、出羽の海門下の精銳と兩々相對せしめんこと、余が滿腔の希望であるが、渠果して之を容るゝや否や。

渠は大正七年一月場所を以て、隱退の式を行ふのであるが、全年五月場所は恩師友綱が勸進元の一人に加はり居る爲め努めて健康を保持し、全場所には勝負を眼中に置かず登場して師恩の幾分に酬ひん事を期して居る。

尙渠は全く力士生活を脱する前、故西郷從道侯の墓前に抵り、恭しく香華を供へて横綱土俵入の式を行ひ、故侯の靈に對して謝恩式を行ふ筈である。

## 第十三 譽れの太刀と金盃

太刀山が本場所を首め各地に於て全勝或は優勝の爲め授與せられた金銀盃は、既に數拾個の多きに達して居るが、其のうち貳個の金盃に關しては趣味深い奇談がある。嘗て東京日々新聞社は本場所中、何人にも太刀山に勝つた力士に與ふる事を條件として金盃の賞を懸け斯道を獎勵したこと二回に及んだ。然るに二回共太刀山の全勝に歸し、此賞盃を



受くる者の無かつた爲め、同社は太刀山を破つた者に與ふる爲めに作つた夫れを、反つて太刀山の天下無敵を賞して渠に贈つてしまつた、二個の金盃は即ち夫れである。又好角家より贈られた化粧廻しは十數組に及び、太刀は十數振も有る。中に就て舊藩主前田利爲侯爵から賜はつた太刀に就ては又傳ふべき美談がある。

明治四十四年元旦太刀山は年頭祝賀の爲め前田侯爵邸へ伺候した、然るに全邸にては全日未明御男子出生あり、豊太閣の誕辰と日時が同じと云ふので、邸内は歡喜の光りが充ち満ち、舊家臣等も參集して祝賀を陳べつゝあつた折も折とて、侯爵は太刀山の來邸を大に喜ばれ、直ちに召されて舊家臣と共に年頭の祝盃を賜り、遂に太刀山は人々と共に、侯爵を胴揚げして前田家の萬歳を壽いだ。其時は恰度太刀山が正大關に昇進して三場所を過ぎ今回四場所目に登らんとする前であつたが、侯爵は太刀山に對し『お前が今後充分に奮闘して横綱の榮冠を贏ち得るやうになつたならば此太刀を屹度お前に呉れてやらう』と床の間に飾つてあつた銘刀を指し示して激勵されたので、其時座にあつた本田男爵、横山一平の兩氏も亦『侯爵が御太刀を賜りますならば、私共兩人は化粧廻しを祝つてやりませう』といふ事になり、渠は又必ず横綱の榮冠を占むべき事を誓ひ、侯爵并に兩氏と堅き握手を交換して全邸を辭した。果然此場所渠は非常の奮闘を試み、十日間登場中相生と預り、駒ヶ嶽と分けたばかりで、渠の爲には苦手たる兩國を始め、綾浪、朝潮、浪の音、八島

山、高見山、常陸山、西の海を屠り盡して、場所中最優等の成績を収めたので、遂に横綱を張らしむるに決し、來る五月場所より日下開山横綱として登場する事となつた。其後渠が侯爵に謁した時、侯爵は『速に横綱になれと激勵したが、餘りに早過ぎた』と戯れられたさうである。

抑も右の太刀は、豊太閣より傳來の名刀として、前田家重寶中の重寶たる由緒があつたので、之を太刀山に賜らうとするに際し、圖らずも親族及家臣中に異議を生じ、又同じく舊領内の出身者たる横綱梅ヶ谷へは與へられなかつたといふ議論も出で、家臣の計らひで太刀の代りに金圓を以てするに決し、太刀山が巡業の途に上つた留守宅へ、前田侯爵の使者が訪問して渠の妻とら子に對し、懇ろに右の趣を陳べて巨額の金圓を渡さうとせられた。然るにとら子は最と肅然に『承りますれば内の關取は、侯爵御前と直々に御太刀を戴くやう御約束を申上げたさうに御座いますが、決してお金を戴く御約束は致してないやうに承つて居ります。御定紋附の太刀なれば縦令木太刀でも決して不足は申上げませぬ。留守を預る妾が御太刀の代りにお金を戴いたと申しては夫、關取に對し辯解の言葉もありませんから、此お金は御預りする事は出來ませぬ』と飽く迄辭して手に觸れやうともしないので、使者も強ひて之を押し付ける譯にも往かず、空しく其まゝ立歸られた。侯爵は之を聞かれて『流石は横綱の妻になる丈けの女である、角力取の女房氣質を遺憾なく



發揮して面白い。一旦渠と約束したもので、今更言葉は變へられぬ』と群議を排して之を授與せられた。そこで本田男、横山氏からも約束の化粧廻しを贈られた。従つて太刀山は、此太刀を視ること猶侯爵に對するが如く、常に敬意を表して居るのである。妻女とら子の態度、侯爵の英斷、共に世に傳ふべき美談ではないか。

#### 第十四 太刀山の生活振

太刀山の性質は温厚篤實で、親に孝行な事はいふ迄もなく、友誼も亦頗る厚く、門弟に對しては之を我が子の如く慈しみ、多くの力士の通有性とも謂ふべき豪放粗大の風もなく、渠が友綱部屋に入門してより其獨立するに至るまで素行上に於て未だ嘗て師匠に迷惑を掛け又は些少にても心配させた事は一度もなかつたのである。

頭腦は明敏にして、計數理財にも長じて居り、地方巡業中、其の小屋掛又は設備の如きは一見して勸進元の費やした金額を知り、言ふ所殆ど實際と適中せぬ事は無いと謂つても宜い。力士隱退後年寄として、協會幹部に入つたならば、協會の財政を整理し之が基礎を鞏固にする上に於て、必ずや相當の効果を擧ぐるであらう。渠の生活は質素を旨として豪奢を避け、克く後進に範を垂れて居る。然も其地位未だ低き時は往々暴飲暴食をしたこともあつたが、地位の昇進と共に大に攝生に注意し、關脇時代よりは稽古の有無に拘ら

ず、食事は日に二回とし、朝は鹽湯一合を嚥下して晝食迄は一粒の米も口にせず、十年一日の如く之を守つて來た爲め、爾來肉太り身神亦漸く健かになつたと語つた事がある。晩酌は日本酒三合で陶然と酔ひ、麥酒は常に櫻ビールを愛用して居る。櫻は日本の國華として、朝日に匂ふ山櫻花は、實に武士道的精神を現はしたものと謂ふべく、散るべき時に散るこそ武士の本領であると自覺し、それ以來櫻ビールを好むやうになつたと聞いて居る。

#### 第十五 趣味及嗜好

太刀山は初め小鳥の射撃を好み、暇だにあれば銃を肩にして山野を跋涉したので、自ら体育上にも裨益があつた。其後に及び、小鳥と雖も生物である、生物を射殺して快しとしたのは慈悲の一念が無い、慘酷の極であつたと、一度び佛心を起してから復た銃を手にした事がなく、狩獵に代ふるに自轉車を乗り習ひ、地方巡業中も常に之を携へ行き、汽車の便ある地方も特に自轉車で旅行したことがあつたが、身体の肥滿するに従ひ、車の上で自由の働きを爲すことが事來ぬやうになつたので之を廢し、更に玉突や圍碁等に耽つたが、是れ亦中頃廢止し、横綱に昇進後は専ら繪畫を學ぶやうになつた。太刀山が畫を學ぶ様になつた動機に就ては、又一つ好話柄がある。渠が横綱に昇進後地方巡業の先き先きで、好角家



から頻りに其手型や筆蹟を望まれるけれども、書は元來得意でなかつたので、好む所に從つて、畫の稽古を初めた。明治四十五年の春福井江亭畫伯と金城の小扇樓に會し、畫伯は全樓の金屏風に富岳の大景を描いた。太刀山は戯れに他の紙に竹を畫かうとして先づ其幹を書いたが、枝葉が甘く書けない、そこで渠は右の手の掌へ墨を塗りつけたく、捺して竹葉に見せたところ、畫伯が之を見て立派に竹になつて居ると賞めて持ち歸つた。渠が竹を畫く動機は是れである。又友人から力士として畫を學ぶなら花鳥等の女性的のものよりは、富岳のやうな男性的のものを學ぶ方が趣味が多いと勧められたので、それから富士山をも描くやうになつたのである。そして自分も亦晩年には廣く天下に雅友を求めて、悠悠閑日月を樂まん事を希ひ、暇ある毎に、熱心に京都の鈴木松年、東京の福井江亭畫伯等の指導教授を受け、今日に於ては其富岳と竹とは、技量の太に見るべきものがあり、渠の畫室には全國好角家より依頼の絹統が常に山の如く積まれて、渠も殆ど困憊しつゝある。太刀山が富岳を描き、常陸山、梅ヶ谷兩横綱が之に讚したるもの、如きは好角家の最も愛重する所、天下無敵の大力士が、其鐵壁をも挫く程の鐵腕を揮つて、巍々として千秋に聳ゆる東海の名山を畫く、芙蓉峰若し靈あらば必ずや莞爾たるを疑はない。

太刀山を愛して交りの最も深き畫伯は、東京に於て寺崎廣業、福井江亭、尾竹三兄弟の諸畫伯、京都に於ては鈴木松年、竹内栖鳳、山元春舉、木島櫻谷、橋本關雪、今尾景年の諸畫伯で、特に鈴木松年畫伯に對しては渠は常に師父の如く尊敬して居る。大正乙卯の歲、清和の月、松年畫伯は丹青を凝らして野見宿彌の像を畫き、之に垂仁帝の朝、宿彌出雲より出て、大和の當麻蹶速を倒した事蹟を記し、更に太刀山は當代に於ける野見宿彌也と斷じ、自ら題して太刀山に贈られたが、眞に太刀山の知己と謂ふべきである。

## 第十六 家族及家庭

太刀山は明治三十七年二月八日愛知縣人で元代議士となつた事のある今は故人の大導忠七氏の媒酌に依り、全縣海東郡蟹江町佐藤喜藏の長女とら子と結婚した。渠は二十八歳で幕内筆頭に在つた時、とら子は明治十三年七月十日の生れで二十五歳の時である。爾來琴瑟相和し家庭は極めて圓滿である。とら子は力士の妻として眞に理想的婦人で、能く家政を整へ、渠をして全く後顧の憂ひなからしめ恣に其力を揮はしめた。太刀山の今日ある、とら子内助の功最も與つて力がある。

太刀山の青年時代より、終始一貫、最も熱心なる後援者にして、太刀山會の幹事たる池田寅治郎氏が、或る時、來訪の某紳士に向ひ太刀山會の會員となり助勢し呉れよと勸説せられたが、此紳士は角力に興味を有たぬ人で容易に承知しなかつた、然るに偶然とら子が池田



氏を訪ねて来たから氏は之を紳士と對談中の室へ通した、すると紳士は、とら子の態度や池田氏と談話の様子を注視して居つたが、とら子が要談を済まして辭し去つた後、徐ろに池田氏に向ひ『世の中は日に月に浮華驕奢に流れ、殊に俳優や力士の妻女の如き一寸外へ出づるにも美服を着けダイヤの指環の二つも三つも簪はめて居る輩やからも多いのに今、太刀山の妻を見たるに身には質素の衣を纏い指環一つ簪めて居らないのみか其兩の手に裂ひ疼びを認むるは家庭に在りて奮闘して居る證據である、されど其態度は流石に大力士の妻らしく夫を思ふ至誠赤心も、貴下と對談中に溢れて居た、余は角力に興味なく太刀山に何等の縁故もないが妻女の態度と至誠に同情したから、今後會員となつて充分の力を添へやう』と即座に快諾し爾來熱心なる後援者となつた逸話もある、婦人の服裝、態度の人を動かす力も亦大なるものがあるではないか。

とら子は嫁入當時は体量十二貫匁中肉中脊の美人であつたが、大力士に配すれば其妻も亦自ら肥ゆるに至るものか、又は他に原因の存するか、今は体量は十九貫二百匁に上り、夫婦の間に二女一男がある。長女花子は十二歳、二女峰子は八歳、長男辰之助は二歳で昨大正五年三月八日を以て以れた。二人の女子は體質母に似て普通の体格であるが、辰之助は骨格、筋肉太刀山に酷似し、本年八月余か之を見た時滿一ヶ月五ヶ月の幼児でありながら其体量は實に四貫六百匁に及び、天晴れ二世の太刀山たるの資質を備へて居る。

此巨童の無病健全に成長せんことを祈るは、天下獨り太刀山夫婦のみではなからう。太刀山が家庭に在つて愛らしき子女と共に嬉々として戯れて居る光景は、宛然まがら小兒の如く、土俵上に鐵腕を揮ふ鬼神の如き渠とは殆ど別人の觀があり、常に春光悠悠たる一個の模範的家庭である。

又老父は田舎生活を好める爲め、故山に土地を買入れて其収入を養老資金に宛て、其老後を楽しく送らせつゝある。

### 第十七 太刀山會及太刀山後援者

太刀山并に太刀山部屋力士を後援獎勵して、大に力士の本領を發揮せしめんが爲め、太刀山會は明治四十二年を以て起り、漸次發展し、大正二年を以て組織を變更し、會則を改め、數千名の會員を有し、板垣老伯を會長に推戴し、池田寅治郎、今澤則次、林哲美、千葉恒次郎、大野清敬、川崎佐吉、葛西虎次郎、玉村勇助、村田元次郎、倉知誠夫、間野半三、山岡順太郎、佐藤達次郎、諸氏幹事として會長を補佐し會務を司つて居る。太刀山をして今日あらしめたのは、寔に太刀山會會員諸氏、并に全國に於ける數萬の後援諸氏の熱誠なる同情と多大の援助に頼るのである。左に太刀山會創設の趣意、會則を掲ぐ。

尙今後太刀會員諸君は固より全國多數の後援者諸君は一層太刀山部屋の爲に援助を與へ



られ、渠の門下より多くの名力士を出し斯界の隆盛を期せしむるやう切に希望する次第である。

### 太刀山會創設の趣意

國家民人の元氣は體力の發現なり、體力の養成と精神の修養とは士道の精髓にして即ち國力興廢の繋る處なり、體育の法一ならずと雖も、吾相撲道は古來國粹之妙技として傳承せられ、幾多世の變遷を経來りて變ることなく、常に世の惰眠を破り、懦夫をして起たしめたり。

現代吾相撲道の發展は、蓋し前古其例を見ざる處にして、名手の輩出尠しとせず、然れども吾人が推賞措かざるもの、横綱太刀山關あるのみ、其體軀偉大、怪力絶倫、向ふ處敵なく、優勝六場所に亘り、江東を風靡せんとす、而かも其性格の高雅にして温容玉の如く、玲瓏爛熳、義に敦く、其後進を扶掖、誘導すること、極めて懇篤なるが故に、其門に入るもの翕然として相踵ぐの盛況を呈せり、體力と精神、力量と人格共に之れ吾人が力士の模範、典型として稱讚する所以なり。

茲に同志相圖り、横綱太刀山關竝に其門下の奨勵、發展を計り聊か相撲道に資し、延て國家民人の元氣を鼓舞振興せんが爲め、太刀山會を發起したり、大方の諸賢、冀くは奮て御賛

同の榮を賜はんことを

大正二年七月

## 發起人

### 太刀山會々則

#### 第一章 總則

第一條 本會ハ横綱太刀山及ヒ太刀山部屋ニ屬スル力士ニ後援ヲ與ヘ力士ヲシテ技量並ニ品性ヲ涵養シ相撲道ノ本領ヲ發揮セシメ斯道ノ隆盛ヲ企圖スルヲ以テ目的トス

第二條 本會ハ太刀山會ト稱シ事務所ヲ東京市本所區小泉町二十七番地太刀山方ニ設置ス

第三條 本會ハ第一條ノ目的ヲ賛同セラル、會員ヲ以テ組織ス

#### 第二章 會員

第四條 本會ノ會員ヲ別テ名譽會員特別會員及ヒ普通會員トス

一、名譽會員ハ本會ニ對シ特別ノ功勞アリタル會員又ハ一時金五拾圓以上若クハ之レニ相當スル物品ヲ寄附セラレタル會員中ヨリ評議員會ノ詮衡ヲ經テ會長之ヲ推薦スルモノトス



二、特別會員ハ一時金貳拾圓以上若クハ之レニ相當スル物品ヲ寄附セラレタルモノ  
 三、普通會員ハ毎年所定ノ金額ノミヲ醸出セラレタルモノ  
 第五條 前條各種ノ會員ハ毎年一月金貳圓ヲ醸出スルモノトス 但シ地方在住ノ會員ハ金壹圓トス  
 第六條 會費トシテ一時金貳拾圓ヲ醸出セラル、方ハ爾後會費ノ全免ヲナスモノトス 但シ地方在住ノ會員ハ金拾圓トス

第七條 本會員ニハ所定ノ徽章ヲ交附ス

第八條 本會員ハ太刀山部屋ノ稽古相撲ヲ隨意ニ觀覽セラルルコトヲ得

第九條 本會員ニシテ退會セントスル方ハ既ニ交附ヲ受ケタル徽章ヲ添ヘ其旨本會ヘ通知セラルヘシ

### 第三章 會 計

第十條 本會ハ會員ノ年醱金及ヒ篤志者ノ特別寄附金ヲ以テ維持ス

第十一條 本會ノ所得シタル金錢ハ力士ノ獎勵救助慰勞並ニ事務費ニ充ツルモノトス

第十二條 第四條第一項ノ特別寄附金ハ本會ノ基本金トス

第十三條 本會ノ支出ハ會員ノ年醱金及ヒ基本金ヨリ生スル利子ヲ超過スルコトヲ得ス 但シ出途指定ニ係ル特別寄附金ハ此ノ限リニ非ス

第十四條 基本金ハ評議員會ノ決議ヲ經確實ナル有價證券ヲ購入シ又ハ銀行ニ預金ス

第十五條 本會ノ收支決算ハ毎年兩度ノ總會ニ報告ス

### 第四章 役 員

第十六條 本會ハ會務ヲ處理スル爲メ左ノ役員ヲ置ク

一會 長 一 名 二評議員 若干名 三幹 事 十五名

第議 ハ 長之ヲ囑託ス

第十八條 幹事ハ評議員中ヨリ會長之ヲ指名ス

第十九條 會長會務ヲ總統シ及ヒ評議員會ノ會長トナル會長不在ナルトキハ評議員中ヨリ互選ヲ以テ臨時會長代理ヲ定ム

第二十條 評議員ハ本會ノ重要事項ヲ評議決定ス

太刀山關ハ評議員會ニ出席シ意見ヲ述フルコトヲ得

第二十一條 幹事ハ會長ノ命ヲ受ケ内外ノ庶務ニ從事ス

第二十二條 役員ノ任期ハ滿二ケ年トス 但シ重任スルコトヲ得

### 第五章 會 合

第二十三條 定時總會ハ毎年一月及ヒ五月兩場所終了當日ニ開會シ會務ノ報告並ニ授賞式ヲ行フ

第二十四條 臨時總會ハ會長又ハ評議員會ノ必要ト認メタルトキ若シクハ會員五十名以上ノ請求アリタルトキ之ヲ開會ス

第二十五條 總見物ハ隨時之ヲ舉行ス 但出席者ハ其費用ヲ負擔スルモノトス

### 第六章 給 與

第二十六條 給與ヲ別チテ賞與、慰勞、及ヒ救助ノ三種トス

第二十七條 賞與ハ成績優良且ツ品行方正ノ力士ニ對シ左ノ各項ニ從ヒ會長之ヲ授與ス

(イ) 幕内ニ昇進セシモノ



(ロ) 幕内成績優良ノモノ

(ハ) 幕下十五枚ニ昇進セシモノ

(ニ) 幕下以下ノ成績優良ノモノ

但賞與ノ金品ハ隨時之ヲ定ム

第二十八條 本場所終了後太刀山部屋力士全體ニ對シ慰勞ノタメ相當ノ金品ヲ給與ス

第二十九條 左記各項ノ一ニ該當スルモノアルトキハ評議員會ノ決議ヲ經相當ノ金額ヲ支給ス

一、相撲道ノタメ負傷シタルモノ

二、相撲道ノタメ不具癡疾トナリ又ハ死亡シタルモノ

三、疾病、水火災、盜難ニ罹リ情狀ノ憫察スヘキモノ

第三十條 部屋力士ニシテ隱退又ハ年奇トナルモノニシテ必要ト認ムルトキハ評議員會ノ決議ヲ經テ相當ノ金品ヲ

支給スルコトアルヘシ

附 則

第三十一條 本會々則改正ハ會員三分ノ二以上出席シタル總會ノ決議ヲ要ス若シ出席者規定數ニ達セサルトキハ假

決議トナス 但同一案件ニ付キ再會ノ場合ハ出席者ノ決議ニ因ル

第十八 餘 錄

大正六年一月場所に於ける太刀山と他の力士との十日間の勝負に就き、角狂生と稱する人より狂歌様のものを渠に送られた、餘録として左に掲ぐる。

初 日 太刀山 源氏山

たち遅き源氏も臆て立會へば

太刀の一突きだちくくと負く

二 日 太刀山 兩國

兩國が外わくかけて禦けども

子供扱ひしたる太刀山

三 日 太刀山 宇都の宮

太刀山が宇都の宮をば正面へ

落してのぞき見るも滑稽

四 日 太刀山 九州山

太刀山が九州山を手玉にし

西の溜へぼんと投げたり



五 日 太刀山 岩木山

岩木山太刀の左足に組附きて  
足と角力を取りし負けさま

六 日 太刀山 栃木山

太刀の聲に立ちて栃木は押したれど  
土俵ぎわにて投げ出されけり

七 日 太刀山 宮城山

太刀山がヨート一聲諸共に  
宮城はボンと毬のように飛ぶ

八 日 太刀山 梅川

太刀山が土俵真中の一突きに  
行司溜りへ梅はけし飛ぶ

九 日 太刀山 小常陸

小常陸に怪我させまいと太刀山は  
一つ叩いてやはくと突く

十 日 大錦 太刀山

大錦二本を差して腹をつけ

流石の太刀を寄り倒しけり

番外餘興

硝薬のたかい爲めにや此場所は

太刀も鐵砲むだ打ちをせず

太刀山が負けて呉れ、ば儲かると

號外賣がかげでひそく



147  
217



大正六年十二月十日印刷

大正六年十二月十五日發行

(非賣品)

不許  
複製

編者 龍野周一郎

發行者 太刀山會

東京市本所區小泉町二十七番地

印刷者 葛西虎次郎

東京市神田區南乘物町十五番地

東京市神田區今川橋

印刷所 青雲堂印刷所



